

始より拜觀のつもりにて來りしに非ず、願くは異様を許されよと云へば、艦長ますく微笑。こまかに艦内を見せて、精しく説明せられたり。下士官室の温度(百十度、機關室は百三十度)實に焦熱地獄也。さうかと思へば、驅逐艦は浪の中を潛りて行くことなれば、司令塔にあるに、冬の日、禪まで水にぬれることありとの事。我々陸上に安息する者が、暑い、寒い、と言はれた義理に非ずと驚歎仕候。月末よりは少しく早く歸り可申候。

都より

山上の御冬籠、さぞ寒かるべしと存申候。冬は、ちと都に出でられては如何に候ふや。靜に書を読み研究などするには、山上が都合よけれど、をりく都の事物に接せずんば、世に

おくれ申すべく候。僕の理想を申さば、一年を二分して、冬より春へかけては、都に居り、夏より秋へかけては、山に居りたく候。

山の夏は、涼しく候ふ哉。蒼々たる山間の月は、世にも心ゆく限りに候。蚊居らねば、蚊帳もいらす。蠅も居らねば、午睡の夢にさはるものも無し。人間の苦熱をよそに見て、心は谷川の水と澄む。秋に入れば、茸生じ、栗笑ふ。霜下れば、満山忽ち錦繡となる。群鳥木の實に來り集り、孤猿夜月に啼く。春の山よきか、秋の山よきかなどと、優劣を論ずる人もあれど、もとくくべ物にならず。山は秋に限り申候。

さは云へ、一冬雪に鎖さるよは、苦しく候。御地のやうな高山や、奥羽地方より北海道へかけては、人は一年の半を爐邊に眠り申候。讀書や研究をよそにしての冬籠は、眠るにて候。他の處にては、一年通じて活動するに、一年の半を眠りては、人生五十年が、正味二十五年

になり申すべく、それで人竝に進歩せむとするは、人力車にて汽車と競走するに同じかるべしと存申候。

活動と休息とは相離れぬものに候。人は活動してのみも居られず。休息してのみも居られず。半年の休息は、長きに過ぎ申候。夏ならば、山にありても活動あり。冬籠は、爐邊の外には、何も活動が出来申さず候。山上にあれば、心のびやかに候ふが、都に出でよは、實に目まぐるしく候。人は、あまりのびやかに成り過ぎてよろしからず。こせくしても宜しからず。平生は、競争渦中に身を投じて、氣を張り、才能をみがき、をりく山などに上りて氣を轉じ、心を養ふべく候。僕は平生、青年の士に向つて、旅行をすゝめ居り候ふが、もとより旅行を専務とせよとの意にあらず。六日勉強すれば、一日遠足し、一年勉強すれば、夏休、冬休、春休を利用して旅行せよとの意に候。旅行いたし居るうちにても、晝間歩けば

夜は、ちと書を読むがよろしく候。夏休は二箇月にわたる。二箇月の間歩いてばかり居りては、頭が馬鹿になり申候。二週間大に元氣に歩けば、一週間は、靜かに落ちつきで讀書すべく候。

世には、大に遊ばむが爲めに、働くといふ考を有する人少なからず候へども、それは大なる間違に候。働かむが爲めに遊ぶべく候。水は常に流れ、日月星辰は、動いて息まず。人間にして、じつとしてのみ居れば、死滅するの外なく候。高樓に住みたく、馬車に乗りたく、美酒佳肴に飽きたく、即ち物質上のあらゆる快樂を貪りたくて、どりや、千金を一攫せむと、血眼になりて、やきもきする人に、大成功を得たる例なし。一時大に金を得ること有之候とも、間もなく、無くなりて、一生たゞやきもきのみして終るが常に候。餓鬼道は地獄にあらずして、浮世に在り。即ち、かゝる人が一種の餓鬼道に陥りたる人に候。之に反して、唯活

動其物が面白くなり候へば、金は自然に大に集まり申候。よしや金が集まらずして、物質上の缺乏有之候とも、心は樂しかるべく候。富める家に甘やかされて、氣まよ、我まよに贅澤の味のみ覺えたる人は、とかく、遊ぶことが本位になり候を以て、この世ながら、餓鬼道に陥るにて候。一瓢の飲、一簞の食、樂み亦其中に在りとは、決して負惜にあらず。顔回の如き賢人は、實際其心持ちと存じ申候。茲に一言駄注を加へ申候。一瓢の飲とは、瓢箪の事にはあらず候。日本の瓢箪は、上下がふくれて居り候へども、支那の瓢は、唯ひとつにまるくふくれて居るものにて、古來水を入れるに用る申候。顔回は、唯飯と水とのみを飲食して、それで晏然として、一生を終りたるにて候。大聖孔子の如き人すら、或點には、一目おいた偉人、酒などの贅澤にはあらず。茶のやうなものも用るざりしとは、さてもくくえらい者に候ふ哉。僕は平生貧乏故、仕方なしに、粗衣粗食に甘んじ居り候へども、十年以來、晩酌を

廢し申さず。まだく修行が足らぬ身と、深く自から恥づるの外無之候。この頃、さる辭書を見申候ひしに、瓢箪の解釋に、顔回の故事を引いて、『簞は食を盛るの器』はよけれど、『瓢は酒を入れるべし』とあり候。それでは、顔回の如き賢人が、酒徒となり申すべく、世間でも或は、そのやうに日本の瓢箪と支那の瓢とを混同し、顔回を酒徒と思ふものあるかと存じ、かくは物識ぶつて、一瓢の飲の解釋を致したるにて候。

八年も都へ出られざる由なるが、來て見給へ。東京は、見ちがへるやうに變つて居り申候。八年前とあらば、未だ電車を知らざるべし。東京も今は電車の便ありと申すだけにては、未だ盡さず。電車が四通八達でも、まだ盡くさず。さて、何と申すべき。蜘蛛の網を引き出し候へば、これとても、陳腐な形容に候へども、まづく、一斑を彷彿するに足らむかと存申候。その電車も、日に月に延びゆき候へば、都に住めるものとても、まごつき申候。その上

にも、市區改正は、次第々々にはかどり、都の外形は、常に動いて止まず。嘗に外形のみにあらず。各方面の文明も、長足の進歩を爲し申し候。八年も田舎に居られては、お氣の毒ながら、自然に田舎くさくなり申候。東京に住めとの意には非ず。をりく都の空気を呼吸し給へとの意に候。實際上の都の空気が腐敗いたし居り、風俗人情にも及び候へども、學問上、事業上には、日にまし清新になり居候。都に住める人は、をりく山に上りて、清新なる實物の空気を吸はざるべからず。田舎の人は、をりく都に出でよ、文明の新空気を吸はざるべからず。されど、少年を早くより都に出すことは、如何かと存ぜられ候。

令息様も、來年は中學に入りうるやうになり居られ候ふが、成るべく、御縣下の中學へ入れらるゝ方がよろしかるべきかと存ぜられ候。人は少年時代は、山野の間にのんびりと生長する方がよろしく候。過日旅行中、馬車の中にて、御者の話をきよ候ひしに、馬は、どうし

ても、南部馬が第一等也。ひろき原野に、こせつかず成長せるを以て、心寛厚にして、惡癖なしと申し候ひしが、僕は、馬の事は知り申さず。人も少年時代より、こせくちよこくと育ちては、到底、大なる發達なく候。

江戸兒と申すものは、氣が利きて、察しもよく、義俠もあり、趣味も解し、涙もあり、意氣地もありて、至極面白き長所も多く候ふが、缺點の方を申さば、とかく、神經が過敏になり、器が小さくなりて、大事業は出來難かるべきかと存ぜられ候。文藝などには適する點もあれど、浮世の事業は、鈍勇を要し申候。剃刀では、髯を剃るには調法に候へども、大きな事には役立たず。刀も入用なれば、鉈も入用に候。なたのやうな人が、存外に大に發達すること有レ之候。

江戸兒は、口は達者で元氣に候へども、山へ上らせて見ると、忽ち弱り申候。妙義山あた

りでも、石門附近なら、まだ、たいした事もなかるべけれど、金鷄、金洞、白雲の頂上へでも上らせて見ると、山間の人が、むしろ滑稽に感ずるほど、たまけ申すべく候。都の人は平生、初上りの田舎者のたまけしを見て、赤毛布とひやかし申居候へども、一たび山に入れば、こんどは、赤毛布から、膽玉の小さい奴と笑はれ申すべく候。妙義山の第四石門を過ぎて、天狗臺にいたらむとする處に、黒田の泣石と稱する處有之。當年黒田伯は、こよから引き返したとの事にて、其を誇張して、かくは、名づけたるにて候。今は鐵鎖がつき居れば、誰れでも通れ申候へども、黒田伯の頃なら、江戸兒の十中七八は、必ず恐れたるべく候。然れども、これ必ずしも笑ふべきに非ず。江戸兒は、都の中に、平地のみ動き居りて、山に上りたることなく、水を泳ぐことを知らず、木に上りたることなく、器械體操もした事なければ、山にのほりて、こはがるは、むしろ當然に候。その代りに、人事の競争はけしき本場に

いさぎよく闘ひ、立派に外面をかざり、一種無形の剃刀の刃を渡る藝を演じ居候。山に入りては、膽力なけれど、都に入りては、大に膽力有之候。之に反して、山間の民は、山にありてこそ膽力あれ。都に出でよは、まごつかざるを得ず、たまけざるを得ず。これも、むしろ自然の次第に候。都にありても、びくつかず。山に上りても、びくつかざるやうにありたきものに候。氣骨、蠻勇は、少年時代に養ひ置きて、長じては、才智藝能を以て、都會の怒濤の中に奮闘すべく候。

妙義山に百々力岩と申す岩有之。數年前、百々力といふ青年士官が、この上にて逆立したりとて、この名を得たるが、前後左右、どちらへ轉びても命はなく候へば、一寸見れば恐ろしく候へども、萬古不動の巖石なれば、巖のくづるよ心配なし。平生、平地にて逆立の出来ぬ人が、こよにて逆立をするは、勇氣の上を通り越して、無謀となり候へども、平地にて逆

立し得る人ならば、この巖上に逆立することは、何でも無く候。巖上の逆立は、例の江戸兒が見たら、たまけ申すべけれど、實は易きことに候。何となれば、土臺が動かざれば也。浮世の大事業をなす人は、土臺がぐらぐら動く幾萬人の頭の上にて、一種無形の逆立をいたし申し候。この方が土臺がぐらつく故、大にむづかしく候。土臺がくづれて、身は、無形の千仞の谷に墮つること多し。それで精神上に死んで仕舞ふやうでは、まだく大事業の出来る大器にあらず候。落ちてまた起ち、逆立してまた落ち、一難に逢ふ毎に勇氣一倍し來り、智の丸、膽の劍、黄金を糧食として、危き人の頭の上に逆立するが、浮世の事業に候。さるにても、巖上に逆立せむには、平素、平地にありて、逆立に慣れて、心に恃む所なかるべからず。心に恃む所あれば、巖上に立ちても、びくつく事なし。もし、びくつければ、平地の逆立に長ずる人とても、過なきを保せず。勇氣はかよる處に必要也。才智以外に、勇の必要な

るも、かよる處に有之候。人の頭の上の逆立とても、之に同じ。恃む所なかるべからず。その恃む所は、まづ身體の健康也、才智藝能也、勇往不撓の精神也、人心を得、信用を博するに足るの徳器也。人は岩上に逆立するの勇氣もなかるべからざるが、事業の上に逆立するを得るの資格は、少年青年時代より覺悟し居らざるべからず。木登りと水泳とが出来れば、山に上りても、何もびくつく事なし。山に上るに、水泳が何の必要ぞとの御疑もあらむが、それは、富士とか、淺間とか、妙義とか、筑波とかと、淺き山にのほるなら、必要もなければ、深き山に入らむには、橋のなき處は、泳がざるべからざる事あり、溪谷を徒涉せざるべからざること多し。山間の急流には、水泳は役立たず候へども、淵に入りて、忽ち土左衛門となるやうにては、心にひけ目なきを得ず。水泳の心得がありて、生兵法を慎みさへすれば、どこへ行きても、心がゆたか也。浮世の活動にも、體力、智力、才能、勇氣、徳器の五つを

備へて居りて、これも生兵法をつよしみ、いそがず、あせらず、泰然として、而かも敏なるべきは敏にして、機先を制すれば、人頭の上の逆立も、さばかり危険にはあらずして、却つて面白きものに候。

少年時代、青年時代には、何人も偉人を仰ぐものに候。仰ぎ居るうちには、だんくほろも見え出し、自惚の炎、盛んに燃え出して、仰ぐの心いつしか消え、お山の大将己れ一人と鼻うごめかすことが、十中八九。少壯時代に威力を逞しうし、老いては、益、暴勇を振ふものに候。とかく、人は青年時代までは、仰ぐことが多けれど、少壯時代に近づけば、仰ぐことなくなりて、横から見るが多くなり申候。横から見ては、前通りは、わかり候へども、奥の處は、少しもわかり申さず。となり近所の人々と、どん栗の脊くらべして、一寸でも、二寸でも高ければ、はや、天下の英雄は己れ一人と自慢すべけれど、もとより仰ぐほどには

高からず。上より見下さば、一寸や二寸の差は、何でもなく、奥も見えすき、目のとどかぬ隈もなし。上より見下すといふことは、口には言ひ易くして、實はむづかし。自分は、上から見下して居るつもりにも、實は、横から見居る也。高き足駄をはきて、爪立ちして、それで人竝より二三寸高くなりて、それではまだく、上より見下すことは出来ず候。山上より四野を見下すの愉快は、山上の人は、常に得ることに候ふが、人生にても、その通り、修養の如何によりて、浮世の野を見下すことが出来申候。人生の山頂に立ち居るは賢人の事にて、こよに至れば、不平も、へちまも有つたものに非ず。人生の野は、一種の樂園となりて、四方にひらけ申候。然し、このやうになり候へば、現世よりも、寧ろ後世に活くるやうになるべく候。孔子でも、孟子でも、耶蘇でも、みな永く後世に活くるの人に候。現世に活きむには、さほど、高くなくとも、よろしく候。例へば、新聞記者の如きは、社會の木鐸と

許すべき筈のものに候へども、一二町も先へ進みては、餘り世間とはなれ過ぎ申候。十間かそこら進み居りて、丁度よろしく候。その方が現世に生活する所以に候。然し天分の高き人が、一二町のみならず、二里も三里も先へ進み候ふは、現世に活くる所以にあらず候へども、それは、また、それで尊く仰がるべく候。

新年早々、下らぬ事ばかり申上げて、相すみ申さず候へども、その中に、何か一つでも、御参考の節も有レ之候はど幸甚に候。

秩父より

草津の白根山へは、十月の三十日、同行十二人にてのほり申候。中に醫師、その夫人（美人也）、小學校長、教員、寫眞師、料理屋の息子、半玉。九人は男、三人は女。七千尺の白根

山上、一尺の雪を踏んで、美人の酌に快く酔ひて、關八州を見下すともいふべき、一種の芝居もいたし候。

上州吾妻郡中之條にも五日滞在、井上江東といふ醫師の快男子、その他諸氏と相知り、日夕相會飲す。一夕五六人にて酒樓にのむ。井上氏一富豪をも呼ぶ。大に酔うて来る。小生（御存じの粗末な風手服装）を見て井上氏に向ひ、本物かくとさよやく。小生に向ひても、本當の大町桂月さんですかと問ふ。『どうもにせ物だ〜』（小生の名のみを知りて、小生をハイカラ風の當世紳士と思ひしならむ）と口にせしが、終に小生の本物たるを知りけむ、涙をこぼして、これはすまぬ事したとて、諸氏のとどむるをも聞かずに、志よけて歸り申候。根は善良なる人に候。その人にあとで又逢ひ、大笑ひになり申候。

秩父の山水は幽にして靈に候。三峰神社のある三峰山は、關東第一の靈地に候。山上に一

泊いたし候。宿屋なし。社務所は、一時に五六百人を容るゝに足る。宿泊料は三十錢を定めとす。廉ならずや。食後、直に酒を強ふ。一合のむも、二合のむも、五合のむも、一升のむも、別に錢は取らず。否、却つて強ふる也。三十錢の宿料にて五合六合のまれてたまるものかと思ふべけれど、この山中にては、一年何百石も「自家醸造」す。酒を茶と同然に思ひ居る也。宿泊者は平均百人を下らず。その盛、想ふべし。三十錢以上は隨意也。金高によりて室を異にし、待遇をも異にす。一圓奮發すれば、特別也。食前に酒出づ。(一圓以下は食後也)朝食前にも出づ。量に制限なし。否却つて多きを喜ぶ。山上の民、みな酒豪、女でも一升やそこらではまだ酔はずとの事也。も一つ他に類なきは、藝人來りて、それく、勝手にその本職の藝を演ずれば、宿料をとらぬのみならず、禮金をやりてかへす也。小生とまりし夜は、六七十人の客有之、法界屋と角兵衛獅子との演伎有之。秩父の都なる大宮を距る六里の山

奥、三千五百尺の山上、一種の別天地に候。而かも交通の便よし。東京より熊ヶ谷を経て波久禮まで二十二里、汽車あり(凡そ三時間)。それより大宮まで六里(實際は五里ぐらゐる也)、定期馬車あり(二時間)。大宮より強石まで四里、定期馬車あり(一時間半)。強石より山上まで二里にして近し。これだけは歩く也。中一里だけが上り坂也。朝一番にて東京を出づれば晩には三峰山上に達し申候。祠殿の宏莊も、關東にては第一流に候。小生事、一昨日、三峰山上にとまり、昨夜は大日向山上の大陽寺といふ山上一軒屋の禪寺にとまり、爐を擁して靜に山僧と語り、今夜強石にやどる。樓は荒川の崖上に在り。瀟洒にして、眺望幽奇也。明日武甲山の頂を蹴て、相模の足柄山方面へ向はむかと存じ居り申候。

箱根より

拜復、〇〇氏の件、拜承、宜しく願上候。

太平記は既に佐伯氏に頼みあり候故、他の物、何か頼みたく候。

吾妻鑑、書紀の翻譯も宜しからむと存じ申候。

函山今や新緑美也。殊に岩崎別邸は宿屋と違ひ、靜にて暢氣也。唯この頃、胸苦しく、氣分すぐれず。これには、ちと閉口に候。早々。

湯本より

第一信

今夜函山へ参り候。溪聲夢に和して寢心地よし。廿二日頃、一寸歸京可仕候。祈御自愛。

第二信

學生文庫題言の件、御忠告に奮發して、今腹案中に候。明日中、おそくとも明後日午前中まで御待願上候。

第三信

小生氣分すぐれず。今日ひとまづ歸京仕候。御心配に不レ及。

箱根山上より

第一信

山上の俊寛、中々都へ出られず。文藝講演會、一回御許しあれ。

第二信

書簡

拜復、おくらし如何にや。この度は容易に山を出で不レ申候。昨日、湯本在郷軍人三十人ばかり、箱根祠へ御惱平愈の祈願いたし候。小生も同行、午後五時より舊道を上り、十二時に歸り申候。感慨無量、實に日本國民は頼もしき人民に候。笹川臨風氏神社巡拜の儀は、敬服に堪へず候。

鵠沼より

第一信

昨夜おそくなりて一泊、今朝歸鵠仕候。先哲叢談原書、うちにあるつもりなりしが、見當り不レ申候へば、至急御送り下されたく、伏して御願申上候。至誠堂御老人へ、よろしく御傳言願上候。御病氣如何、御伺ひ申上候。

第二信

先哲叢談作者原善の事蹟は、詳細わかるまじくや。御調べ下されたく願上候。

第三信

拜復、腹案中也。何卒今二三日御待下されたく候。

伊東より

第一信

大島へ渡り、二泊いたし候。

西風漸瀝送三濤聲。夜半山樓夢易驚。

千載英魂何處弔。島王邸畔一牛鳴。

百歳のをんな牛曳く椿かな
伊東の冬は暖かく候。御自愛あれ。

第二信

米櫃の底の響きに驚きて河東の獅子は吼えむとすらむ

〔日東のをのこ道別と誇ろへど河東の獅子吼米櫃の音〕といふ歌に答へし也

伴妻 兒航大島舟中作

父曰三原岑、噴火堪登臨、八郎雄圖跡、豈可不弔吟、母曰大島女、鬢々黒髪深、欲使我女
傲、不顧船暈侵、兒也無所解、唯隨父母尋、風浪十餘里、扁舟載二兩心、
原稿の方は遅々として進まず。煩悶致居候。

大島より

第一信

又々大島へ渡り候。當分滞在の筈。

世を避けて文を物すと離れ島配所の月を罪なくて見む

第二信

大島の冬、暖きこと春の如くに候。

都をば八重の潮路に離れ来て冬なき島に冬ごもりする
唯西風の強きが玉に疵也。祈御自愛。

第三信

書簡

落日の直に海に入るは最も美に候。

夕付日眞赤になりて渡津海に入りたる後の空のさやけさ

幽囚中より

近來御起居如何。僕、幽囚の中、ひそかに四郎をつれて海に入り、黒き貝を拾ひ來る。細君曰く、それは猿頬と申すものにて食はれずと。

おやくくく猿頬なりとけなされて拾ひしかひもなかりける哉

やよや吾子汝れもよく知れこの貝は決して拾ふべからざる頬

焼いて犬にやりけるに、大喜びにて食ふ。

細君にはねつけられし土産物犬におくるも仁者ならずや

猿頬にふくるよ夫婦けんくわより犬のくふだけ貝はまされり

御一笑々々々。

杉鳥山へ

梅雨の天、快晴快甚、伏惟万福、幽囚幾月、この頃漸く娑婆に浮び出申候。去二十一日國學院に於て杉浦先生祝賀會有之候節、幾んど廿年ぶりにて、即ち學校卒業後始めてにて吉田君に遇申候。武島君も見え居申候。依て翌二十二日午後四時より富士見樓に同窓懇親會相開くことに決し、富士見樓と岡田君とは武島君が通知すること、貴兄佐々君下村君へは小生より御通知申すこととなり居候處、小生へ電話かより來り直に他の小宴に赴き候故、小生は歸宅後手紙を出し居りては間に合はずと存じ、一切の通知を武島君に頼みしつもの處

それが武島君に通じ居らず。武島君は小生が通知をしたるものと思ひ、小生は武島君が通知したるものと思ひて、翌二十二日富士見樓に至る。武島君来る。岡田君来る。吉田君来る。貴兄佐々君下村君は待てどく見え。終に疑を發し問ひ合ひ申候處、通知してなきことが分り、吃驚仰天、下村君へは電話をかけ、貴兄と佐々君とへは、使を走らせたる次第に候。佐々君は來れり。下村君は他の宴會へ赴き居れり。而して幸にもその宴會が同じく富士見樓なりしかば、下村君と小生と便所にて相逢ひ申候。茲にまた一つの滑稽が起り申候。小生は下村君が他の富士見樓以外の宴會より我懇親會の事を聞きりて來りしものと速了し、ひと足お先へとて室に戻り、『下村君が來た〜』と一同に吹聴し候處、久しく待てど下村君來らず。終に疑を發して女中に搜してもらひ、下村君が同じ富士見樓の他の宴會に來り居ることが分り、こゝに始めて下村君來る。其宴會にありし中野禮四郎君も來る。これにて興更に加はり

たるは好かりしも、樓を辭すれば、早や電車なく、一同大閉口といふ滑稽が起り申候。斯る珍らしき會に貴兄の見えざりしは實に残念に存申候。小生粗忽の罪、請萬恕。間の抜けた男がたまに幹事役を勤むれば、名詮自稱、『おほまちがひ』が起り申候。御一笑よと。

松本道別へ

拜復、十一日の演說會の件、拜承仕候。

姉崎博士へは郵便にて頼み申候。なほ念の爲め、貴兄よりも直接逢つて御頼みになりては如何にや。久しく御病氣の由、さぞ御困りと存申候。小生も年暮以來、一月一杯は、何となく頭悪く、ほんやり過して、文債山積、閉口いたし居申候。

貴兄も御無職にては、御困りと存申候。小生も暗に貴兄の爲めに心配はいたし居り候へど

も、未だこれと申す案も立ち申さず。口譯水滸傳は、如何になり候ひしや。宋江は非凡の偉人、宋江去つて後また宋江無し。知らず、黒旋風去つて後また黒旋風有レ之候や否や。春の太陽は暖也。この頃の冬の太陽は、冷たく力なく候哉。いづれ拜芝の上。早々。大瀑のつらとなりてさがりけり

道別・桃葉へ

梅雨未ニ全晴、伏惟萬福。御承知の『少年日本人の弓矢』、勢力範圍をひろめて見むとて、孤軍を進むるにて候。勝てば大慶、負くれば頭を掻いて退かむのみ。一つ應援の爲め、序文御書き下されずや。御願申上候。但し言文一致にて、極めて平易に願はしく候。追白

- 一、あまり褒め過ぎぬやう願上候。
- 二、秩父行は今しばし乞御待。

田中桃葉へ

初夏温和、益御清勝奉レ賀候。長々の拙稿、こと(伯爵後藤象二郎)先づ脱稿仕り、今整理中也。やがて出獄すべし。青蟲の蝶となりたる若葉かな

伊澤修二氏へ

御手紙難有拜讀仕候。言語上決して父を見習ふべからずと嚴戒したきが如何にやとの御問

の儀、拜承仕候。斯様の儀は御尋無之候とも、至極結構の事に候ふに、事倫理に關すとてわざく御問に及ばれしは、けに周到なる御用意と敬服仕候。斯くまで色々矯正の手段をつくさるゝ御深切の程は、猶更感謝に不堪候。何卒宜しく御願申上候。小生の吃音子に傳染せしかと思へば、子に對しても氣の毒に存候。愚鈍の資、缺點多く、惡癖多く、吃音の外にも惡く傳染するもの多かるべしと平生心にひやく致居候。唯文章だけは聊か自から信するの點も有之、もとより必ずしも學者文人になれと強ふるつもりは無之候へども、如何なる職に就きてても、文を能くするに越したると無しと存候ふが、將來は知らず、今の處は、二兒とも文章を好む癖は、未だ感染し居らぬやうに候。若し二箇の事柄が許され候はど、父の吃音は學ぶな、文章は學びて可なりと御教下され候はど、仕合に候。御深切に甘えて親馬鹿の根性、下らぬ望蜀の慾を申上候。されど、これ末也。目下の急務は吃音矯正の一事に有之候。

おかけ様にて折角矯正いたしても、家にかへらばまた舊に戻ることもあらむかと、それも氣にかより申候。とかく缺點多き身の子を持つは心配なものに候。筆もてばつい筆が走りすぎて、餘計な愚癡まで並べ立て、御清聴を煩はし候段、恐縮千萬に候。頓首。
再伸 五日間延ばして、二十日迄御教授を願ふの儀、宜しく願上候。就ては追加の費用如何ばかりに候や。御面倒には候へども、御一報下されたく願上候。

伊澤末五郎氏へ

昨日は參上、失禮仕候。餘りに年の若きものを二人迄も御願申し、洵に御迷惑とは存じ候へども、何分にも宜しく御願申上候。

長男は十三歳に候ふが、身體は普通の人の十五ぐらゐに見え申候。久しき前より御教授を

希望いたし居り、殊に明春中學に入學する迄に、吃音を直し置かねばならずと、心配いたし居候間、御無理を御願申したる次第に候。親馬鹿の段、何卒御清願上候。次男の方は、まだ十歳に候へば、御教授になほ一層御骨折の事と存じ申候。到底豎子教ふべからずとの御見込に候はゞ、御遠慮なく御申遣され度候。早速迎ひに參るべく候。

同病相憐むとやら。況して親なり、子なり。小生事吃る爲に不便を感じしこと甚しく、我子のどもるを見ては、常に腹の中にて涙ぐまれ申し候。

小生もこれ迄、いろく工夫いたし、ひとりにて發音するには吃らず。人と對する場合に吃ることあるは、人の前と思ふ故也。銜ふ心、はにかむ心、激する心などを去らば、吃りもなほらむとて、これ迄自から求めて人の集まれる座に赴き、随分思ひ切つた放言もいたし、講義演説自から進んで引きうけて、人の前と思ふ心を去るやうに、自からつとめ申候。

昨日は、餘り少年だからとて、溢い顔()をなされし處を、無理に御願ひ申したる故、心おくし、例の吃音出で、口大に溢り候。小生も兒等と共に御教授を願へれば、好都合に候へども、今の境遇之を許さず、また年齢の點に於ても許さざるべし。今の處、どうにか、かうにか間にはあひ居申候。

貴殿も今こそ吃らざれ、もとは小生と同病にて、吃るが故に繪畫を御修行なされし由。樂石社の御教授は、自から吃音を直したる故人の吃音をも直してやらむとの御志と竊に敬服いたし候。道こそ異なれ、小生は吃るが故に文章の方に力を入れ申候。もとより文才の無き身、今はどうにかかうにか筆に衣食し居るは、吃りし賜物かと自から慰め居申候。支那にても韓非子吃れり。楊子雲吃れり。日本にては、熊谷直實吃れり。徳川家康も少し吃りし由也。今の世、三宅博士の吃音も有名に候。男子に多くして女子に少なきは、如何なるわけに候ふ

やらむ。近くは小生の舊藩主山内容堂公も少し吃りし由に候。

わづか十日や二十日にて、必ず二兒が生れかはるやうに吃音がなほると、迷信者が神に祈るが如くには豫期し居らず。なほれば此上もなき仕合に候へども、小生の考にては、吃音の矯正の方法をうけたまはりて、それを長き時間にかけて練習すれば、必ずなほると云ふことだけは信じ居候。昨日餘り幼稚なりと言はれし御心中を察して、此言をなす。御教授を疑ふ次第には候はず。

小生の経験によるに、口がペラ／＼軽きは、期間的もしくは三太夫的にて、ひとかどの人士は、口が少し重い人の多きやうにと存ぜられ候。殊に講義演説などは、ペラ／＼と軽きよりは、口の重き方が身にまみ申候。これ我田引水的に候ふや。御考如何にや。いづれ正月の五六日頃には、今一度参上いたすべく候。令兄様へも何卒宜しく御傳言願上候。

幼少なものとて、御用捨なくドシ／＼嚴重に願上候。それが兒等の修養になり申候、不足金の分は、書肆への都合有之、二三日の中差上申すべく候。

笹川臨風へ

片田舎のうれしさは、この頃は、驚來りて庭先を飛び廻り申候。飛び廻るといふよりは、むしろ這ひ廻り申候。未だ喬木に遷らず、聲もまだ溢つて若々しく候。さてこの度御手紙もて御勧誘御推薦の件、おほしめしの程は、難有拜受仕候。然るに自から願るに、新聞記者と申す柄でも無し。まア／＼志を肆にして、江湖に放浪いたし居るべく候間、左様御承知被下度、不取敢御返事申上候。祈御自愛。

再び笹川臨風へ

松本道別へ御傳へ下されし御好意の趣、感佩に堪へず候。かばかりの重ねぐの御好意に對し、唯一言、新聞記者といふ柄でもなしとのみ御断り申すは、折角の御好意を無にする次第、今夜か明夜か參上して、お伺ひしたき事はお伺ひも致し、然る後に改めて確たる御返答仕るべく候。いづれお目にかよりて申上ぐべけれど、こよに一寸小生の考を申さば、御令弟の如きは、政治科を出でられて、政治や經濟や、社會やの事情に通じ居られ、其上にも文藝の才を有せらるゝ事にて、立派に新聞の記者、殊に主筆の資格あるものに候。小生の如きは、全く經濟を知らず、政治にうとく、社會の事情にくらく、新聞記者としての一大要件を缺く。それで主筆などとは、自から願みて餘り嗚呼がましく候。もとより迂拙愚鈍の資、常

人よりも智慧が十年以上も後れ居り候。この頃書を讀むに、始めて書物が分りかけて來たるやうに覺え申候。今より自から檢束し、節を折り、成るべく俗交をさけ、書物と親しみて知識を得、思想を養ひ、識見を練るつもりに候。とかく小生は臆病にして氣の弱き男、何事も消極的にして進取の氣象に乏し。先年は自から文藝評論の才なきことを自覺しながら、高山樗牛の如き奇才の後をつぎて、世に恥をさらし候ふに、今又新聞記者の資格も無き癖に主筆となりて、又世に恥をさらさむこと、餘りに男子の恥辱なりと、心弱さに御辭退申す次第、何卒惡しからず御了承願上候。

獄中の松本道別へ

先月末、家兄病死致し、看病やら葬送やら、前後一箇月間は其爲にこたつき、氣にかより

居りながら御無沙汰仕候。山根氏も病氣の由なりしが、よくなりて、いよく十二月二日、文藝講演會をひらき申すこととなり居り候。諸名家の文をあつめて『冬木立』と題する考に候ふが、原稿未だ全くあつまらず、來月中には纏める考に候。講演集は賣ゆきよろしからず。故に第二以下は見合せる由に候。世の中は思ふやうには参らず候。觀音經をよまれて大に慰安を得られ、かねて大慈悲心を起されし由、大慶々々。御注意の段も多謝いたし候。俗慮凡念を去りて、ひとへに修養の道に精進し給はむことを祈申候。秋風の冷かなるに、身體ますます弱り候へども、くよくよ思つても仕方なしと、氣を長くいたし居候。

再び獄中の道別へ

唯今御手紙拜讀いたし候。山根氏の幹旋にて、二日文藝講演會相催し、三百人以上の聴衆ありて、可成盛況に候。山根氏より御宅の方へ結果の諸報告ありたる事と存候。いづぞや貴兄が小生へおくりられし端書も、先般小生がさしあけし手紙も、前後新聞にいで申候。御勸の觀音經講話、是非一讀いたすべく候。小生の主義に接近せりとの御一言、うれしう存申候。御入監は、貴兄にとりて、大なる修養になりたることと存申候。今日の御苦痛は、他日の御幸福。むかしの吉田松陰、文天祥などを思ひ出されて、なほこの上にも十分人格御修養の道に猛進せられむことを希望いたし候。御出獄の日、相逢つて語らば、昔日にもまして、話しが合ふならむと樂み居り候。年の暮に及んで、文債山積、閉口いたし居り候。『冬木立』も原稿集まりがたく候ふが、『冬木立』の名の相應する限りにて、まとめむと存候。山根氏は講演會を幾んど獨力にて幹旋し、このたび醜金の事にも盡力され居り候間、貴兄より、禮を言はれたし。唯小生は、貴兄が夏日の猫の最期の如く思ひあきらめて、靜かに將來の御發展の事の

みを念ねんにかけられむことを祈いのる。この頃、會心くわいしんの友の來訪らいほうするもの無し。「道別下みちわか獄來城去ごくらいじやうきよ」の一句を得たるが、あとの句を考かんがふる違ちがひなくして止とみ申候。過日くわじつ近郊きんかうの寺を通りしに、大なる公孫樹こうそんじゆ、黃葉わうえつして太はだ見事也。公孫樹こうそんじゆの黃葉わうえつは、花よりも、楓葉ふうえつよりも、小生の趣味しゆみを感ずる所。久しぶりにて一絶いつせつをつくる。

古鐘樓外夕陽殘こしゆらうがいせきやうざん。

風帶ふうたい蒼烟そうえん晚更寒ばんげいざん。

墜葉たいえつ續つ紛ふ黃滿わうまん地ち。

公孫樹上こうそんじゆじやう鶉聲しゆせい酸さん。

御自愛ごじあいを祈いのる。

十二月十四日 (明治三十九年)

入營中の某青年へ

拜復はいふく、御問合ごもんあの件けんに付、愚見ぐけん左に申陳候。

貴翰きかんすらくと淀よどみなく、言はむと欲する所を言ひつくして間然かんぜんする所なし。御文言ごぶんげん御筆蹟ごひつせき等にて想像さうざう仕候に、貴君は生活せいかうに不自由ふじゆうなき家庭かていに穩おだやかに優やさしく育そだてられたるにあらざる乎。又思ふに、貴君は眞面目まじめなる人なるべし。正ただしき人なるべし。清せいき人なるべし。斯かる性質せいしつの貴君が、和氣わき霽あ々たる家庭かていを出いでよ、あかの他人たにんの中に生活せいかうすれば、不ふ平へいもあるべく、苦悶くもんもあるべく、愚癡ぐちも起おけるべきは、自然しぜんの人情にんじやう也。然しそれが貴君きくんの爲ための藥也。「可愛かほい子こに旅たびをさせよ」との古諺こげんを能あたく味あじはれよ。貴君の今日あるは、貴君の父祖ふその御蔭おかげ也。貴君の父祖ふそは必ずや貴君きくんが今日こんにち苦くるまるよよりも、なほ幾層いくそう倍ばいも苦くるしまれたる也。貴君家きくんけに在あらば、樂たのしかるべし。然し貴君が樂たのしき思しのみして、青年時代せいねんじだいと壯年時代さうねんじだいとを過すされなば、貴君の一生しやうじゆはそれで善よかるべけれど、貴君の家が潰つぶるよにも至いたるべし。「艱難かんなん汝なんを玉たまにす」との古諺こげんをよく味あじはれよ。むかしの先生せんせいは嚴格げんかく且かつつ猛烈まうれつなりき。今の小學中學せうがくちゆうがくの先生せんせいは、一般いぱんにおしなべて

やさしく候。恰も保母の如し。今の軍隊教育は、實に嚴格峻烈也。然れども昔の名師は、今日の軍隊教育よりも、なほ峻烈なるものありき。今の人一般に保母の如き先生に育てられ居る也。而して一朝軍隊教育を受ければ、忽ち其嚴なるに驚くべし。貴君、請ふ、何故に學校の先生が寛にして、軍隊の先生（士官下士官）が嚴なるかと思ひ給へ。小學や中學にては、一般の人を教ふる也。故に寛厚にして可也。軍隊は國家の爲に命を擲つ人を教ふる也。故に嚴ならざるべからず。軍隊にても、將官よりは佐官が嚴也。佐官よりも尉官が嚴也。士官よりも下士官が嚴也。これ、さもあるべきこと也。貴君の如き純良の人に向つては、嚴にせずとも善きこともあれども、一般に不純良の人多き故、おしなべて嚴にせざるを得ざる也。貴君は今や一兵卒也。然れども、暫し一兵卒の身を離れて、下より見ずに上より見られよ。即ち國家の政治家、若しくは軍隊教育の任に當る者となりて考へ見られよ。必ずや、

軍隊教育が學校教育と其趣を異にせざるべからざる所以を、了解せらるべし。足下は今迄家庭が樂しかりしならむ。然れども、二年間苦しき軍隊生活をつとけて家に歸りて見られよ。家庭かなほ一層樂しくなり申すべし。『苦は樂の種』とは是れ也。僅々二年の苦勞、これ却つて、君及び君が家の將來の大幸也。

謹んで貴君に告ぐ。『如何か男兒』といふことを考へて見られよ。男子は健闘を愛せざるべからず。勇氣を愛せざるべからず。規律節制に服せざるべからず。さらば自ら兵營生活も面白くなり申すべし。小生は兵營生活の經驗なし。されど少時小生を鞠育したる叔父は、當時大隊長なりき。又小生は、少時より貧書生の生活を續け居り申候。右の愚言、決して机上の空言には無レ之候。御賢察あれ。

異郷（臺灣）の風土、御自玉あれ。

新婚の某夫婦へ

『世の中に戀しきものは父母の外にあらじと思ひしものを』と歌ひけむ。御身等御兩人は、今や、その父母よりも戀しき人となりもし、なられもして、人生中最もうれしく、最も樂しき御境遇。浮世がまよになるなら、われらも今一度若返つてと、白髪頭叩いて、餘所ながら羨望に堪へず候。この上は、末の松山波こさず、琴瑟相和して、御家益々榮えゆかむことこそ願はしく候へ。

何か將來の心得になるととの御言葉に甘え、利口ぶつたこと申し上ぐるも、自から之を能くせりと申す次第には候はず。過去を顧みて、あよでは無かるべかりしをと思ふかずく、前車の覆轍、或は後車の戒めにもとの、一片の老婆心の程御汲み下されよ。

花笑ひ、鳥歌ふ陽春の好時節も、長くはつどき申さず。浦島太郎、龍宮へ参り、世にも美麗なる乙姫の聲となり、浮世の外のあらゆる榮華を極めて、何一つ不足は無かるべき筈なるも、歡樂極まつて、哀情多しとやら。人情は單調に飽く。乙姫に別れて故郷にかへりしは、乙姫をいとふに非ず、故郷の戀しき也。浦島の心を輕薄と申すべきには非ず。忽ち熱し、忽ち冷え、忽ち喰ひつくやうに可愛がり、忽ち詛ひ殺すやうに憎むが、輕薄と申すものに候。熱せず、冷えず、いつも適度の温味を帶ぶるが、夫婦の愛の長つどきする所以かと存申候。夫君にのみ申しあげたきことあり、又妻君にのみ申しあげたきこともあれど、隠しだてするは、夫婦不和の基、明らさまに御兩人の前に申し上ぐ。願くは、愛に狎れさせ給ふな。狎れ給ふな。いとしゃ、可愛やとばかり、餘り鼻の下を長くすれば、驕慢の心、茲に生ず。されど、匂ひこほると紅顔は、いつまでか、つどき申すべき。桃を分ちしは、愛のあまりと喜

びしも、後には、我を馬鹿にしたる仕打と怒りし例もあり。愛に成りし夫婦は、必ず愛に破る。女には、六分の愛あつて、四分の敬あるべし。男には、六分の愛あつて、四分の憐あるべし。愛は對等の域也。敬は見上ぐるの域也。憐は見下すの域也。これ必ずしも男尊女卑の東洋流にもあらず、男女必然の結果にて候。夫の本色は妻子を養ふにあり。妻子を養ふの力なきものは、これ夫にして夫にあらず。男は力也。故に女は男の勇を要すと云へり。妻の本色は、夫の力によりて家を治め、子女をそだつるに在り。夫をして、益其力を伸ばさしむるが、良妻也。妻をして、安心して神佛に逢ひたる心地さするが、良夫也。それにつけても、妻に敬あれば、妄りに恨まず、妄りに腹立てず、すねず、やけにならず、失望せず。夫に憐あれば、妄りに怒らず、愛想つかさず、残酷なる事をせざるものに候。一方に敬なく、一方に憐なくして、茲に夫婦喧嘩起る。夫婦喧嘩は犬も喰はぬとやら。喧嘩なしに一生を終る夫婦は、世にも幸福なる哉。

敬は、夫の力を信するより起り申候。夫の力を信ぜむには、智を要す。朱買臣の妻、其夫を侮りて見限りしは、畢竟するに、智なくして、夫の力を信する能はざるに由れり。世にはかゝる例、頗る多し。夫に力ありとも、妻に眼識なくんば、猫に小判也。夫婦相知ること難し。佳人多く拙夫に伴うて眠ると云へり。よかれ悪かれ要らざるお世話、わしが眼鏡でほれた人』といふ俗諺通りに、妻が夫を信じさへすれば、天下太平也。貧乏世帯も、毫も苦にならざる也。然るに、女は、とかく、年とれば、慾のみ深くなり、死ぬるまでも、欲しきは著物と金、金と著物ともらひさへすれば、どんな愚物でも夫大明神、然らざれば、意氣地なき男、こんな處へ来るんでは無かりしと、くやし涙をこぼす。女こよに至れば、竟に濟度し難き也。一方の夫の方の事を言へば、如何に力あるも、妻をして其力を信ぜしめざるは、夫

として、缺點なしと云ふべからず。力あるとは、必ずしも富貴の謂にあらず。如何に力あるも、逆境に陥ること多し。榮枯貧富に關せず、妻をして己れを信ぜしむるが、即ち夫の憐に候。又義務に候。

さるにても、幼稚園の生徒に、高尚なる學問は教へらるべくもあらず。妻餘りに愚ならば到底夫の趣味、識見、人格を知る能はざるべし。かくては、名目は妻なるも、實は給金要らぬ下女也。夫の心さびしからざらむや。よしや、結婚の當座は、お互に心を知りあふも、夫は社會に活動するにつれて、智進み、趣味も進む。妻は、依然として、もとの妻也。たゞ我に著物を買つて呉るゝ時のみ、ほくく喜べど、己れを進めやうとせず、毫も夫の職業に同情を有せず、夫の理想や趣味やに風馬牛となり、唯つのるは、氣隨と慾と横著、我足らぬことは知らぬが佛、否、閻魔、面ふくらして、ふてくさる。あゝ、こんな妻をもつては無かり

しをと、歎息するは、愚癡なるべし。かくなるも、つまりは愛になるよに由るとに候。愛のみなら、動物にもあり。人とても、下等社會なら、いたし方なきこともあれど、苟くも、中等社會以上の夫婦では、この憐と敬との眞意を解せざるべからず。この二語の眞意が心から分り候へば、それにて、夫婦の道の大本は立ち申候。

男は女の美を愛すと古人も申しよ如く、とかく、若いうちは美にのみあこがれ候へども、試に五六人も子供をもつて見給へ。美人もへちまも有つたものにあらず。唯よく子女を育つる賢母が欲しくこそ候へ。風葉の句に、『鴛鴦の子も欲しうなき姿かな』されど、健全なる女は、必ず子を生む。子をもつて未だ親の恩は知らずとも、何よりも先きに、賢母の必要を感じず。良妻は第二の問題に候。子の賢愚は、母の賢愚に由る。偉人の母は、必ず賢女なれども必ずしも美人にはあらず候。或は老い込んだこと言ふと、御笑ひかも知らねど、他年子を多

くお持ちに成らむ時、成程と首肯せらるべしと確信仕候。
さるにても、夫婦間の物質上の最大幸福は、身體の健康に候。今や、梅一輪づよの暖さ、
木は芽ぐみぬ、鶯は啼きそめぬ。御兩人様とも、國家の爲めに、御自愛あらむことを祈り申
候。

某高利貸へ

誠に何とも申譯なく候。昨年夏までは、何事もきちんくと参り居り候ひしが、一朝病氣
と、一定の收入を失ひし爲とによりて、貴家に對しても、御迷惑のみ相かけ、洵に相濟み不
レ申候。心は奮發すれども、身體未だ全く舊に復せず、漸く今日を支へ居候次第、虚偽を申上
ぐる考は無レ之候へども、事志と違ふことのみ多く、昨年以來は、一身上のみならず、一

家上にも不幸に不幸かさなり、あせればあせる程、筆却つてはかどらず、いつも御約束の期
日を違へて、洵に申譯なく、お目にかよるも面目なく、手紙をあけむとするも、同じやうな
言譯にて相すまず、遷延して今日に至り申候。親戚のもの年久しく支那へ参り居り、少し都
合よく候ふが、この夏、一寸歸朝せし際、事情うちあけ相談致し候ところ、どうか都合つく
やう考へて見むとて、數日前また支那へゆき申候。愈の返事は支那へ著きて工夫の上にてす
べしとの事に候。さしせまりては、これを頼みにいたし居り候間、左様御承知願上候。腹藏
なく打明け申さむに、昨年来幾んど遊びて暮し候ひしかば、諸所に不義理の借も多く出來申
候。されど高利の金は、貴家の外には、昨年春〇〇氏より三百圓借り申したるものみに候。
〇〇氏より督促太だ急也。終に一昨日〇〇氏よりの執達吏参り、家財差押へられ候。見つも
り金高百圓餘に候。來る二十一日午前八時競賣の筈に候。今の處支那の親戚の返事を待ち居

り候間、その返事の來るまで待つてくれるやう〇〇氏に相談致し候處、六十金だけ利子を入るれば、待たむとの事に候ふが、時日さしせまり居るため、或は間にあはぬかも知れず、大に困り居候。小生の病氣、胃腸がもとにて、頭の具合わるく、病氣の爲に御迷惑かけて洵に相すまず、偏に恐縮の次第に候。右のまゝに、現在の事情をのべて、御返事申上候。

某館主へ

拜啓仕候。益、御清勝奉三大賀候。甚だ申上兼候へども、茲に一つ御願有レ之、小生受持の原稿料、一月分三十圓にお上げ下されまじくや。在來は、一枚の原稿料一圓二十錢にて、都合十七圓に候ふが、其れを三十圓に願ひ申すことが出來候はば、一枚が凡そ二圓になり申候。このやうな厚顔しき事を申上ぐるは、心に忍びざる所にて、これと申す理由も無レ之候。唯一

家の事情を申上げて、御同情を仰ぎたく候。小生事は一生清貧に甘んじ申すべく候へども、子供だけは人竝に教育をうけさせむと存居候。五人の子の中、長男は既に中學校へ参り居り、次男はこの四月より中學へ入り得るやうになり居り候。三男は小學校。第四子の女の子は今年學齡に達し居り候處、片田舎の學校にては風儀も悪く、女の子だけはよしや月謝が高くなり候とも、中流の子女の集れる處へ入れたくと存申候。それにつき、四兒の月謝、制服、電車賃、其他教育上に要する費用、この春よりは、俄に増加いたし申候。就いては、件の原稿料は、一切子供の教育費に充てよ、他の費用には用ゐず、餘れば貯蓄して置いて、他日の用に充てたくと存申候。今の處巻頭は八頁に候ふが、御思召にて紙數を御増し下されてもよろしく、とにかくに、彼の原稿にて、一定して毎月三十圓頂戴することを得候はば、四兒お蔭さまにて、人竝の教育を受くるを得、小生もお蔭さまにて、安心して親の務が果され申す次

第に候。このやうな事申上ぐるは、不本意の至りに候へども、子故に馬鹿になり、平生の御交誼に甘えて、恥を忘れて御願申上候。筆意をつくさず。偏に御賢察下されたく候。

吾家有四兒

吾家有四兒。三男與一女。嬌癡未解禮。索食恰如鼠。兒笑我情暢。兒泣我心傷。皆有讀書癖。且喜健而康。雀母不_レ生_レ鷹。何責_レ兒不賢。文章了_レ我生。衣鉢何兒傳。

故人贈佳肴

故人贈_レ佳肴。可_レ無_レ一杯酒。問_レ婦婦曰無。問有_レ錢曰有。提_レ樽夜自行。深巷聞_レ吠狗。得_レ酒心未足。迂路呼_レ吟友。展聲相和高。月下雙影走。春來久不逢。借問有_レ詩否。

雜



牛 經

牛も鳴き狐も鳴きて別れ哉

吉原第一の名妓と謳はれたる花扇、千思萬考すれども、解する能はず。終に閉口して、なじめの龜田鵬齋を呼び寄せて、之を問ふ。鵬齋打笑ひて、其方は振つたるよな。人もあらうに蜀山人を振るとは、さてく殘念なることを志たるものかなといふ。振つたりと聞きて驚き蜀山人と聞きて、猶更驚き、膝を進め、腰を揺がして、其故を問へば、牛は何と鳴くぞ。もうく。狐は何と鳴くぞ。こんく。初會に振られたる故に、もうこんくとて、裏を返さざるなりと云はれて、うれしや、句の意は分りたり。蓬頭粗服、風采あがらざる一老書生なりしに、それを蜀山人とは、如何にして知り給ふぞと問へば、凡そ天下ひろしといへども、

雜

今の世、蜀山人ならで、かよる句を咏み得るものあらむやと言はれ、吉原第一も今日限りと齒をくひしぱり、わつとばかりに泣き伏す。

水莖の跡うるはしき一片の玉章は、牛と鳴き、狐と鳴きし蜀山人を吉原に呼び寄せぬ。桃と櫻を両手にもちて、どちが桃やら櫻やら。右に鵬齋先生、左に蜀山人、天下の風流は我一身に集まれりと、小さき鼻うごめかしかけるが、蜀山人の書き残したる一筆、濁の字を何と讀むぞと、宿題をかけられて、はてなく、二水に虫、玉篇にもなく、康熙字典にもなし。又も閉口して、ひそかに鵬齋の智慧を借りて、うれしや、く、

風月を裸になして角力かな

と分り、につと笑つて、なじみの日の来るを待つ。

世は何處まで下りゆくことぞ。大正の聖世、學者はあり。文人はあり。歌人はあり。俳人は

はあり。記者はあり。小説家はあり。娼妓はあり。藝妓はあり。高等の内侍はあり。而して鵬齋なく、蜀山人なく、花扇なし。

趣味くさく

一 酒の趣味

ウイスキーか、ブランデーか、強き酒を、五勺乃至一合、ぐつと飲み、喉を刺撃し、腹を刺撃し、陶然たる心地になるを適とす。酒は、精神的のもの也。必ずしも肉體的のものに非ず。酒中の趣は、牡丹餅を食ふことなどの比に非ず。大に酔はむには、日本酒がよし。ビールも、冷えたる生ビールを五六合、がぶつと飲めば、大に快きもの也。

二 碁の趣味

箴砮なれば、名手をうつて樂むといふまでには、進み居らず。唯、元氣よき打方をなし、終局の勝敗を氣にかけずして、攻勢を取り、臆せず、びくつかず、難局にあたりて、悠然として堅忍不拔の氣象をあらはすを適とす。唯守るを主とし、負けじとつとめて、毫も活氣なき人とならば、むしろ打たざるに如かず。

三 女の趣味

女は必ずしも美なるを要せず。憎氣なく、いやみなく、胸豊かに、腰太く、血氣よく、おとなしくて快活に、無邪氣にして、氣が利くを適とす。家に女なかるべからず。酒の前に女なかるべからず。女に對すれば、唯可憐を感ず。其強きを求めず。友とするにあらざれば也。

四 書物の趣味

感情に訴ふるものは、韻文と散文とを問はず、みな好き也。男性的意氣地を示すもの、最

もよし。物のあはれを歌ふものも、亦よし。唯一身上の不平、愚癡、艱苦を訴ふるものは、見て面白からず。

五 音樂の趣味

日本の樂器ならば、尺八と太棹の三味線を好む。尺八には悲涼の音あり。太棹の三味線には、沈痛の音あり。義太夫、非音樂的の分子多く、且つ卑俗の趣あれど、余の好む所也。一寸したるものにては、松前追分、二上り新内などよし。聲はさびて、情をふくめるを尙ぶ。女ならば、二十四五歳以上がよし。詩吟も、さびたる、情をふくめる聲を以てすれば、人を動かすに足る。輕浮なるものは、すべて好まず。カツホレは卑俗なれど、さまで輕浮ならず。その陽氣なるを取るべし。

六 旅行の趣味

汽車、人力車の及ぶ處にては、さばかり趣味を感じず。高山に登ること、最も愉快也。千丈の瀑に對すれば、終日あかず。山中の湖の幽寂もよし。怒濤怪巖を嘯む海岸もよし。平穩明媚なる風光は、きらひにはあらねど、好きにはあらず。

七 愚の趣味

よろづ察々たるは、使ふには調法なれど、人として趣味なし。理性あまりに明かに、意志あまりに強きは、學者として、事業家として、缺くべからざることなれど、人は情なくして面白からず。固より馬鹿にては、志かたなれど、愚と馬鹿とは別也。わけはわかつて居れど、また間の抜けたる處もありて、こせつかず、びくつかざるがよし。利害にのみさときは一寸得するやうなれど、結局は大に損也。愚の趣を解する人ならでは、人の上に立てず、奇功も奏せられず、又朋友としても面白からず。

八 男らしいことの趣味

女は女らしかるべし。男は男らしかるべし。氣取つたり、えらがつたり、通がつたりするは、識者が見て傍いたく思ふ所なるべし。こせつかず、びくつかず、死生得喪の外に超然として、男性的意氣地あるを適とす。學や、藝や、實は末也。われは、最も男らしき人を愛す。

九 作文の趣味

雄大の文を好めど、自からは之をよくせず。又幽奇の文を好めど、之も自からはよくせず。人を刺撃する文、人を動かす文、また人を笑はせる文、みな余の好む所也。氣あり、才情あり、かねて識ある人にして、はじめて余の好きな文章が出来るべし。

十 庭園の趣味

衣食住には、さばかり趣味を有せず。唯成るべくは、庭ひろくして、綠樹の志けからむと

を好む。その上に、涌き出づる清泉ありて、鯉のおよぐあらば、終日之に對して、あくことを知らず。

十一 博愛の趣味

名聞の爲にあらず、私利の爲にあらず、唯人を氣の毒に思ふの餘り、我力をつくし、我財を散す。これその適とする所也。報酬を求むるにもあらねば、門戸を張らむとするにもあらず。唯我が好む所に従ふのみにて、必ずしも、世上の毀譽、一身の損得如何を問はず。かくて智なくば、所謂お人よしなれど、智あれば釋迦となるべし。これ品性の然らしむる所也。品性のなき人が、この趣味を解せざることを、なほ、下戸が上戸の趣味を解せざるが如くなるべし。

文壇名勝誌

赤門川 大學川の一支流也。一に文科川と稱す。大學川は國庫山より發せる大川也。六つの支流あり。法科川、醫科川、工科川、文科川、理科川、農科川、これ也。その中にて、文科川最も幅せまし。されど、深し。支流より本川へかけて、博士魚を産す。この川の名物也。之を捕ふるには、推薦網を用ふるを、最も便とす。巧者なるものは、論文網を用て、之を捕ふ。まれには、洋行網を用て、とれることあり。この川には、また多く學士魚を産す。近年、産出額多きを以て、賣れ口よからず。

早稻田川 流域は赤門川より遙に短けれども、幅は之にまさる。寄附山より發し、大隈村に至りて、はじめて早稻田川の名あり。近年しきりに、早稻田學士魚を産出す。風味、赤

門川の學士魚に似たり。されど、價廉なるを以て、需要ひろし。

逍遙市 早稻田川の川口にある大都會也。港をひかへて船舶幅輦す。その中に英國の船

多し。もとは學校多く、書店多かりしが、近頃は劇場大に榮ゆ。脚本館がこの市の名物也。

抱月町 逍遙市より程遠からぬ處にありて、可成り繁華なる都會也。この町も港をひか

へ、近年、獨逸船、つき始めしより、逍遙市の繁華、やゝ茲にうつれり。早稻田文學といふ

有名なる學校、もと逍遙市にありて、一時廢校せしが、近頃この町に再興し、可成りに盛ん

也。商業可成り振へども、固有の産物は無し。多くは舶來品也。

巽軒山 赤門川の上流にある連山也。其主峰を哲學峰といふ。教育峰、宗教峰、文學峰、

美術峰など、左右にひろがりて、横に長きこと、その幾里なるを知らず。遠方より望めば、

見事なる山也。

竹風神社 ニイチエ尊を祀る。本能満足の神符を出し、靈驗いやちこにして、一時は大に

繁昌せり、繁昌せしにつれて、旅館、酒樓などの大なるもの多く出來たり。この地、風光美

なるを以て、遊客多し。

萬年橋 大學村と文部村との間に架せる大橋也。長さ百間。國語山を望むには、此橋を

最も佳とす。國語山の秀容を賞せむとする者は、この橋に來らざるは無し。この橋に上らざ

るものは、未だ共に國語山の美を談ずるに足らざる也。四里ばかり下の方に、東圍橋あり。

二橋の中央に、芳賀橋あり。三橋とも、長さはほど相同じく、唯萬年橋は木造、芳賀橋は石

造、東圍橋は鐵造也。國文山を望むに最も佳なるを、東圍橋となす。芳賀橋は、國語國文兩

山の眺望を兼ねたり。

嘲風寺 巽軒山の麓に在り。可成り有名なる寺也。本尊は宗教哲學菩薩也。印度傳來の

ものと稱して、世之を珍重す。境内に文學觀音堂あり。女人多く參詣す。

鷗外市 逍遙市に次ける大都會にして、赤門川の川口より程遠からぬ處にありて、海に

臨めり。ことには、獨逸の商船多く集まりしが、近年貿易衰へて、市はさびれしが、新に醫科大學出來て、やと人氣を恢復せり。

硯友湖八景 眉山の秋月、廣津の夕照、江見の歸帆、巖谷の晚鐘、湖の西岸にあり。和

泉の夜雨、小栗の晴嵐、徳田の落雁、春葉の暮雪、東岸に在り。近年東岸には、温泉處々に出來てより、遊客頗る多し。就中小栗村の温泉には、男女學生の來り浴するもの多し。

露伴院 郵便和尙の開山に係る。堂宇甚だ壯大也。古より有名なるが、賽者は多からず。

支坊も多かりしが、大半廢れて、今存せるは、鶴伴、關月の二坊のみ也。

澁柿山 山上に歴史小説寺あるを以て、有名也。麓に、女人堂の跡、今なほ存す。

篁村の關の舊址 むかしは、有名なる關所なりしが、今は廢れたり。されど一種の風致ある處なれば、風騷の士、時に其關址を訪ふものなしとせず。古人の吟詠少なからざるが中に、

篁村の關 能飲法師

都をば霞と共に出でしかど秋風ぞ吹く篁村の關

天外が岬 長く海中に突出す。崖高く、浪はけし。魔風戀風吹き來れば、往々船舶を覆

す。地理を知れる漁夫は、平氣にてこのあたりの沖を船にて通れど、慣れざる者は、恐れて近づかず。

赤門川沿岸の社寺 赤門川は舟楫の便あるを以て、その沿岸、到る處、可成り榮えて、

社寺の名あるもの多かりしが、今は多くは廢れたり。新に出來たる社寺もあれど、その名の

少しあらはれたるは、草二寺、瓊音神社などにて、羽衣神社、醒雪寺、嶺雲寺、天隨寺、鯉洋寺、臨風神社、晚翠寺、芥舟神社などは、すべて、すたれたり。その村々の有志者、再建を圖りつゝあれば、いづれ、その中に再興するものあるべし。

早稲田川沿岸の社寺　この川も舟楫の便あるを以て、沿岸の諸所に村落多し。社寺も可成りありて、その中には、すたれたるものあれど、新に起りて、可成り名あるもの多し。春雨寺、梅溪神社、醉夢院、孤島神社、白鳥院、未明寺など可成り有名也。

晶子沼　和歌村にありて、大なる沼也。新派葦と稱する一種の葦を生じ、その花頗る美なるを以て、來り賞するものも多し。この沼には、鴛鴦常に多く浮べり。この外、和歌村には沼多し。鐵幹沼、薰園沼、柴舟沼、空穗沼、竹柏沼など、いづれも風景よし。躬治沼は、近年埋められて、田となれり。

柳村公園

赤門川に沿へり。園内に、翻譯花、紹介花など多く、ハイカラの學生、來り遊ぶもの少なからず。この頃、象徴花といふ舶來の花多く移されて、物好きの人の、杖を牽くもの、可成り多し。

新體山の七湯

新體山には、古來温泉多かりしが、泉脈時々かはるを以て、興廢一ならず。藤村温泉は、一時最も繁昌したりしが、今は、温泉出でざるやうになれり。その代りに炭坑發見せられて、昔にまさりて繁昌す。泣葉、有明、泡鳴、白星、花外、醉茗、夜雨の七温泉、この山にあり。夏は浴客多し。

天溪が岡

太陽村にある長岡也。山海田野を見渡して、眺望よし。

獨歩島と花袋島

相接して、自然生の花木多し。花袋島には文章世界神社ありて、大に繁昌す。獨歩島には、新古文林神社ありて、可成り有名なりしが、近年海嘯の爲めに奪ひ去

られて、未だ再興せず。

漱石瀑

赤門川の上流にある大瀑也。深山の奥にありしを以て、世にあらはれざりしが、

四五年前、一匹の怪猫、時鳥村に出で、人家をあらしければ、血氣の若者ども、之を捕へむとて、其のにぐるを追ひて、山深く入りしに、思はずも、この濕を發見せり。直下百丈、頗る奇觀也。觀覽者多くなるにつれて、本年、瀑の傍に、朝日樓といふ料理店も出來たり。

酔後放言

女性黙して、男性歌ふは、動物界自然の法則也。人間となりては、女性が、生意氣にも歌ふものあれど、これ自然の法則に反す。宜なり、女性の聲の、すべて輕薄にして、浮華なることや。歌ふは、男の喉に限る也。

女性醜にして、男性美なるも、動物界自然の法則也。たゞ人間にありては、勞働せざると化粧に意を凝らすと、毛髮、衣服の美を借ることの多きとに由りて、美人の稱は、女性の專有となり居れど、根を洗つて見れば、外形の美は、男性に在り、女性にあらず。

女性淫を好まずして、男性の多淫なるも、動物界自然の法則也。動物の歌ふは、すべて男性が女性を口説くの聲也。人間の男性の聲の美なるも、この理由にもとづく。たまには、女性にして多淫なるものあり。丙午に生れたる女は、必ずしも恐ろしからず。多淫なる女が、男を喰殺す也、兄を殺す也、親をも殺す也。

女性の美は、顔よりも、むしろ腰にあり。日本の女服は、最もよく、その美をあらはすに適す。女性の禮服に、冬でも羽織を用るさせぬは、古の哲人、さすがに拔り無き哉。

東京で堂々たる者は、西郷隆盛の銅像唯一つ。下つて、常陸山の角力、松太郎の三味線。

料理屋では、柳橋の龜清、彼の紅葉館の如きは、下宿屋の大なるものに過ぎず。牛肉屋では四谷の三河屋。吉原では、大文字樓の階子段と、お夏の鼻。

日本で堂々たる者は、富士の山。臺灣の新高山は、これより二千尺高けれども、美觀遙に下るべし。その富士を眺むるに、駿河方面は、だめ也。近くてよきは、甲斐の河口湖畔。遠くてよきは、江の島。

世界で堂々たる者は、日本國。萬世一系の帝室をいたどきて、人心の優美にして、かねて武強なること、幾んど人間以上也。

女は、一種の生きたる便所也。藝娼妓は、一種の共同便所也。これ、男性より見たる也。生物存在の意義は、子孫繁殖に在り。随つて、女性が主也。男性は、たゞ、種取に過ぎず。これ、造物者より見たる也。女性、之を楯に取りて可也。

小絃錄

浮世の習慣、儀式、道徳、法律は、愚衆を律する所以也。非凡の士には、迷惑な話し也。警ふれば、小兒、女子、病人、片輪者などが、ぞろ／＼と列を組んで歩く中に、健脚の人のまじるが如し。

社會は萬人の社會にして、一人の社會にあらざれば、一人の心の満足を得むが爲めに、社會を犠牲に供すべきにあらず。せめて、列外に獨歩せしめよ。物外に超然たらしめよ。物質界をはなれて、精神界に遊ばしめよ。これ或は社會に柔順ならざるも、社會を害するものにあらず。

世の愚衆、己れを標準とし、常識よりわり出し、奇異の士を嘲りて、愚と呼ぶ。されど、

大に賢なるものは、愚に近からざるを得ず。狂人じみたりといふ。されど、古來天才者誰か狂味を帯びざらむや。仙人じみたりと云ふ。されど、精神界に遊ぶものは、自から仙骨あるべきなり。

世の實用に供するには、銅鐵の類にて澤山也。すぐれたるも、鐵中の錚々たるものにて可也。金剛石や、金や、白金や、實用に供せむには、餘りに高尚也。

世によく働きて、益をなすものは、必ず一方に害毒を流す。無能力者も、氣付かずして弊害をかもす。害をなさざらむと欲せば、物外に超然たらざるべからず。

内には、慾あり。外には、金あり、酒あり、女あり、樓臺あり、花あり、錦繡あり、名譽あり、事業ありて、慾を釣り出す。釣り出されて、活動す。人生とは、此の如きのみ。

悟るも一生、迷ふも一生。悟りて苦まむよりは、迷うて樂まむに如かず。

大に悟る能はずんば、大に迷ふべし。いづれも安心立命を得べし。なまら半弱の悟りでは、ことに到る能はず。長明は悟れり。文覺は迷へり。西行はなま半弱に悟れり。

酒宴の興をさますものは、半可通也。學問の邪魔をする者は、村學究也。道德を妨ぐるものは、道學先生也。社會を害する者は、僞豪傑、似而非賢人也。

冷たきは、氷、女の腰、今の紳士紳商の胸。

四萬圓をはねつけて、貧學生となじみたる藝者あり。百圓の賄賂に釣られて、獄に投ぜられたる教育家あり。

新年の屠蘇機嫌に、馬より落ちて氣絶したる將校あり。嗚呼、太平の世なる哉。

用立つ上より云へば、虎や、獅子や、猫に劣らむ。釋迦も孔子も、時に小僧に劣らむ。名畫を私有する者、珍寶を私有するもの、美人を私有するもの、いづれも社會の賊也。

子供は、菓子をはしがり、女は著物をほしがり、世俗は金をほしがる。脱俗したりと稱するものも、なほ名をほしがる。

本名のほかに、更に名あるものは、娼妓、藝者、役者、義太夫、落語家、畫工、詩人、文人。死すれば、更に戒名あり。名を好む國民哉。

坊主、餘計な世話をやきて、生前世に賣れたる名をすてよ、本人のあづかり知らぬ戒名を石塔に刻せしむ。人を馬鹿にしたもの哉。

昔者、張巡、己れの妾の肉を將士にわかつてり。仁なる哉。もし生きてるまゝの妾を將士にわかたば、更に仁なるものならむ。

世に仁なるものは、歸つて肉を細君におくりし東方朔よりも、情を萬人に賣るの不見轉藝者也。

社會を悩ますものは、人類の繁殖也。されど、その悩を輕むる仁者なきに非ず。地震也、海嘯也、肺病也、ペスト也、藪醫者也。

歌つて錢を乞へば、乞食と云はれ、怒鳴つて錢を乞へば、ゆすりと云はれ、義捐に託して錢を乞へば慈善家と云はる。

人の死に衣食する者は僧侶也、神官也、葬儀社也、墓場の乞食也。人の病に衣食する者は醫者也。人の生に衣食する者は産婆也。

詩人は社會の寄生蟲也。批評家は更にまた詩人の寄生蟲也。支那の受賣すれば、腐儒とけなされ、西洋の受賣りすれば、博學多識の先生とほめらる。

家毎に錢をねだるものは、乞食也。家毎に投票をねだるものは、國會議員也。疊の上の乞食は、娼妓、藝者、坊主、一種の所謂慈善家。

客を迎ふる時には、牛となり、客を送る時には、をりく馬となる。本尊は、狐にや、狸にや。歌ふは猫にや。客は馬と鹿との合ひの子にや。

當代の理想

大學生曰く、多く参考書を讀ますとも、ノートブックと首ツ引して、試験の成績をよくし高等文官試験に及第し、うまく運動して高官にありつき、抱へ車を置き、美人を得て妻とせむ。

文學者曰く、如何にかして原稿料の直上げをなして、多く金を得、金時計を買ひ、流行の新衣裳を求め、吉原に行きて流連せむ。

小學教員曰く、郡視學の機嫌を取り、二三圓にても月給の多き處に轉任さして貰ひ、身の

安樂を圖らむ。

學者曰く、うまく運動して洋行さして貰ひ、かへつて大學の教授となり、論文をかよすして博士となり、西洋の受賣して法螺吹かむ。

商人曰く、出来るだけ不正をなし、悪品を高く賣りつけて奇利を得、早く五十萬圓以上の資産家の中に入り、別莊を設け、妾を置かむ。

官吏曰く、上は長官のお髯の塵を拂ひて昇進を圖り、下は御用商人の賄賂を取りて懷中を肥さむ。

新聞記者曰く、風教に害ある艶種を多くして讀者の歡心を買ひ、名ある人の私行をあばきて世の好奇心を惹き、金をゆすり、かくて賣高を多くし、財政をゆたかにせむ。

政治家曰く、國家よりも我黨が大事、我黨の消長よりも一身の榮枯が大事、地方の富豪を

だまして金をまき上げ、鵜の目鷹の目、政府の失策をさがし出して、内閣を乗取り、大臣となり、馬車を驅らむ。

嗚呼當代人士の理想、果して此の如き乎。もとより十人十色なれども、皆歸する所は、私慾の満足をはからむとするに過ぎず。その一身の爲めに圖ること拔目なしと云ふべし。而して獨り國家の前途を如何せむや。

當代の不平

學生曰く、こよの下宿屋は食物悪くなれり。同じ宿料にて、まづいもの食ふ。馬鹿々々しき哉。

小説家曰く、物價騰貴せる今の世の中に、原稿料は依然として故の如し。馬鹿々々しき哉。

軍人曰く、老朽士官上にあり、我等手腕ある者の通路を妨ぐ。馬鹿々々しき哉。

官吏曰く、同僚某、何等の働なきも、上官の機嫌取るに巧なるを以て、昇進頻り也。我れ腕前あるも、上に媚びざるを以て用ゐられず。馬鹿々々しき哉。

教育家曰く、教育ほど尊くして大切なる事業はなきに、俸給家計を補ふに足らず。馬鹿馬鹿しき哉。

今の世の不平といふものは、概して此類乎。一身に關する小不平のみ多くして、主義に對し、人道に對し、社會に對し、國家に對する不平はなし。たまく之あるも、假りて以て私を濟さむとするに過ぎず。余輩を以て見れば、眞にこれ馬鹿々々しき哉。

古人の不平

試に紀貫之をして、不平を言はしめむ乎。曰く、凡そ事物は、その類多し。且つ目になるれば、清新なる事も、陳腐となり、奇抜なる事も、平凡となる。柳宗元が、『欸乃一聲山水綠』と云ひ出したる時には、奇抜なりしが、後世の詩人がその口眞似して、『猛虎一聲山月高』といふに至りては、さばかりの手柄もなし。『老泉一聲山月青』などと、眞似するに至りては、本元の名句も、爲めに陳腐化せり。われは延喜時代の新派歌人也。奈良朝の粗野、六歌仙時代の樸茂より一轉して、かけ言葉など自在に使用して、流暢佳麗なる新格調をつくり出せり。されど、折角の新格調も、二十一代の久しき、のべつに眞似せられては、自から陳腐とならざるを得ず。わが土佐日記も、當時にありては生面をひらきたるものなるが、後世の和文家ども、これも、その眞似するに至りて、これも陳腐となりぬ。また我古今集の序も、當時にありては、名文のつもりなるが、代々眞似せられては、これも陳腐となりぬ。眞に死んだ

詩人を評するならば、下より溯り見ずして、上よりくだり見ざるべからず。この頃、専門の歌人ならぬ日南が、我が爲めに、一寸辯じたるの言、簡單なれども、余にとりては、知己の言也。されど、余の本質は、詩人よりも、むしろ能吏也。余の以前に、詩人の本質をそなへたるものは、人丸と業平との二人を尤とす。

試に、馬琴をして、氣焰を吐かしめむ乎。曰く、明治の世になりて、勸善小説風むき悪くなりて、余を説く文士も無くなりたるやうなるが、それは餘りに極端也。明治の世、小説家多く輩出したれど、いづれも、社會の水平線以下の小人物也。一世を指導するだけの識見と力量とを有するものは、一人も無し。憚りさまながら、われは當時の小説家の群より一頭地を抜き、文教を司れる儒者と徑路を異にして、世を感化したることは、知る人ぞ知る。その感化力の大きなことは、仁齋、徂徠、さては益軒以上なるかも知るべからず。日露戦争起る

に及びて、武士道の呼聲が高まりたるが、古來、誰も完全に、武士道を説きつくしたる人なし。やたらに、儒者のかきたる書類をあさらむよりも、却つて我か小説を見よ。武士道の本體は、ままとつて我小説の中にある也。

試に、近松門左衛門をして感慨をのべしめむ乎。曰く、さても世には思ひがけざることもあるもの哉。われは時代物に幾んど全力をつくして、多く之を作り、世話物は、今ならば三面記事を採用したるまでの事にて、その數も、時代物の三分の一にも足らざるに、圖らざりき、明治の世になりて、案外にも、その世話物がもてはやされて、日本の沙翁などと、かつぎ上げられむとは。

片雲錄

○知識は他より授かるを得べし。知恵は自から得ざるべからず。

○智者と見らるゝは、眞の智者に非ず。

○威張る者は未だえらからず。

○怒り易きものは、與し易し。

○大我を通さむとせば、小我を屈すべし。

○集まり難きは金。金に集まり易きは人。

○ねだつても悪く思はれぬは、寫眞と、著書と、神佛の御利益。

○犬、人の轉ぶを見て、嘲つて曰く、生意氣にも、二本足にて歩くから、轉ぶ也。なんぞ我等の如く四本足にて歩かざる。

○多く知るよりも深く知るが、智を生ずるの方法也。

- 男性は俯し、女性は仰ぐ。仰ぐは助けられむとする也、俯するは憐む也。
- 怒れる仁王は寺の門に在り。慈悲の本尊は本堂に在り。
- 偉人を崇拜せざる人は、必ず其人も他に崇拜せられざる人也。
- 人の長を知るは、大也。人の短を容るれば、更に大也。
- 世に非難せらるゝ間は、なほ其人の生命あり。全く非難せられざるに至りては、全く老朽したるもの也。
- 智の無き善人よりは、智のある悪人。
- 智は怯者をして勇ならしめ、怠惰者をして勤勉ならしめ、悪人をして善事をなさしむ。才は然らず。
- 凡人は、人の才を知つて、人の智を知らず。



- 大、虚榮心を去れば、何處にゆきても、臆する所なし。女一のをまき
- 愚者や、婦人は、己れの手柄を吹聴して、人にほめられたがるもの也。
- 自信ある者は腰自から低し。媚ぶる者は、わざと腰をひくよす。
- 人を容るゝ能はざる者は、自からも人に容れられず。
- 人を容るゝ者は、皮相上には、人に昇がれたやうに見ゆるもの也。
- 我が非を知る人は、進歩の見込ある人也。
- 凡人の不平、煩悶、怨恨は、すべて己れを以て人を律するに基づく。
- 希望の裡面には、必ず煩悶あり。
- 己れを知る者は、賢人也。
- 己れを知れる者にして、はじめて、眞の希望あるべし。

雑

噂は、凡人小人を天上にかつぎあぐることもあり、善人賢人を谷底へつき落すこともあり。

妄りに人の噂を氣にする者は、到底自信を貫くこと能はず。

○大なる蝦蟇、田圃を這ひまはりて、氣焔を吐いて曰く、蛇よく蛙をのむも、その體すべて細長し。我輩を如何ともする無しと。傲然として谷底に行く。大蟻を見る。曰く、これ僵木の化けたるもの也。蛇に非ず。 偉大ちりらんらん

醉 漢

一日細君、とりついで曰く、『先生居るかッて怒鳴つて、書生風の人が参りました。大變酔つぱらつてる様子でございます。通しませうか、どう致しませう。』通せ、く。』

なる程、逢つて見れば、酔つて居る。膝は正しくして坐つたが、『先生、失敬』と云つて、

右の手を右の耳まであけたり。その掌は全くは開かず、お招きする手付の如し。然しまだ正氣はあるやう也。

『先生、煩悶救済の先生、先生も大酒家だといふことは、先刻承知して居ります。お若い時は、大分道樂をなさつた事も、ちやんと先刻承知して居ります。それで、先生は大にはなせるお方だと思つて、参上した。我輩も酒のみみます、道樂も致します。然るに、どこへいつても、女にもてず。いづくんぞ煩悶せざるを得ざらむやです。どうでせう、先生、この煩悶を解く方法なきものにや。』

あきれた人也。まじめに辯解も出来ねば、叱られもせず。『それは面白い煩悶也。成る程、男振がよくて、氣前がよくて、錢ばなれがよくて、到る處、女を魅するといふのは、普通の人の眞似の出来難き藝當也。されど君、世に拘摸といふものあり。電車の中などにて、巧に

人の物をとる。之も中々眞似の出来ぬ藝當也。どうだ、君は拘摸の藝當が出来るか。『出来ません。』『さらば、なぜ煩悶せざるにや。』女にほれられるのと、人の物をとるのとは全く別也。『たいした差別もあるまじ。拘摸は、人の物を取り、色男は女の愛をとる。取るはひとつ也。殊に女喰ひに至りては、公然、女の物を取りて、女をまるはだかにす。全く拘摸と同じからずとするも、五十歩百歩ならずや。こんな下らぬ話はやめにして、どうだ君、まだ飲む元氣があるか。』『おほ有りです。實は、女よりも酒にほれられたいんです。』

青年大に飲んで、志きりに管をまきしが、終に横になりて眠りぬ。數時間にして覺めぬ。酔中の元氣は、どこへやら、手をもじくして、謝して曰く、『酔つて仕舞つて、何を申しあげたか、さつぱり覺えませんが、どうも氣にかよつてなりません。何か失禮な事は致しませんでしたか。』『何も失禮な事は無かつた。唯、君が女にほれられる祕傳を聞いたから、精しく教へてやりしが、君は覺えて居るか。』『忘れて仕舞ひました。残念な事をしました。も一度、御話が願はれますまいか。』『二度言ふと風をひく。酒に酔つたら、また御座れ。』

成り上り者の時代

日本の時代を身分によりてわかつてば、三あり。曰く、公家時代、武家時代、成り上り者時代これ也。公家時代とは、平安朝の末までをさす。此間、天下の權をにぎりしものは、公家也。武家時代とは、鎌倉幕府のはじめより江戸幕府の終までをさす。此間天下の權をにぎりしものは、武士也。成り上り者時代とは、即ち明治時代也。社會の各方面に勢力を有する者は、所謂成り上り者也。

天孫降臨以來の元勳藤原氏、即ち公家が實權を握りしは、身分相當也。龍種の裔なる平氏

源氏、即ち武士が公家に代りて實權を握りしも、亦身分相當也。武士時代の中にて、鎌倉の北條氏、足利時代の下剋上、織田氏、豊臣氏など、やゝ成り上り者に近けれども、なほよろづ武士的態度を失はざりき。明治時代に至りて、三千年來潛屈したる平民、はじめて社會の表に飛躍せり。

もしまだ服裝によりて、各時代をあらはせば、公家時代は、裝束時代也。武家時代は、甲冑もしくは社袴時代也。成り上り者時代は、袴羽織もしくは燕尾服時代也。束帯したる公家は、概して風流都雅なりき。社袴つけたる武士は、概して剛毅質樸なりき。燕尾服つけたる成り上り者は、竟にこれ沐猴冠を免れず。

吾人は頑冥固陋、徒らに公家時代、武家時代を夢想するものに非ず。平民も同じく社會の水平線上に飛躍するは、社會進歩上、必然の結果にして、四民平等は、天下の公道なるを知る。たゞ國家百年、禮樂未だ起らず。公家、武士すたれて、眞に紳士と稱すべき階級未だ起らず。禮儀なく、廉恥なく、人はたゞ私利私慾の動物となりて、社會は百鬼夜行の觀あるを悲まざるを得ず。

陵谷百年、變ればかはる世の中哉。如何に金あるも、威張ることを得ず、斬棄御免の下に人權を蹂躪せられて、ぐうの音も出でざりし素町人の輩、今は社會の上層にあり。雙刀を帯びて、社會に闊歩せし武士も、扶持にはなれては、木から落ちたる猿也。士族の商法に、公債證書をすりはたして、昨日にかはる裏店の借屋すまひ、冠履所をかへて、今は社會の下層に淪落す。陪臣の又陪臣、何處の馬の骨ともわからぬものも大臣となり、醜業婦も玉の輿にのりて貴婦人となり、高利貸も貴族院議員となり、裏店のおてんば娘も鰻茶式部となる。維新以來僅々三十年間の變動は、我國振古以來、未だ曾て其比を見ざる所也。今の世、勢力を

得る所以のものは、黄金也、お上手也、所謂働き也、藩閥也、黨閥也、情實也、賄賂也、殘忍酷薄也、肩書也、洋行がへり也。品性徳操、禮儀廉恥、情誼任俠、君子志士の域は、成功する所以に非ず。而して小人、惡黨、公盜、世に陸梁す。甚しい哉、社會の制裁すたれて、風俗の壞敗せるや。

既に成り上り者也。志つけなく、教なき家庭に生ひ立てり。醜業婦を妻とし、更に多くの妾を蓄へたる家庭に、所謂家庭教育なるものあるべき筈なし。人を用ゐるに、たゞ働きを問うて、品性を問はず。教員を採るに、たゞ學問を試験して、人物を試験せず。こすきを賢とし、誠實を迂とす。今の世の中に、いかでか社會の制裁あるべき。家庭も社會も腐敗し居りながら、徳行のあがらざるを、學校徳育の不完全にのみ歸す。誤れる哉。

されど、余は顧みて、世の慷慨家に告ぐ。今の社會を見て、過憂すること莫れ。社會の病

は、なほ一身の病の如き乎。もとより藥を投ぜざるべからざれども、あまり藥を投じすぐれば、却つて害になりこそすれ、さまでの效はなきもの也。大抵の病は、あわてよ藥をのますとも、不養生だにせざれば、放棄して置きてもなほるもの也。「時」は大智者なる哉。又一有力者なる哉。過渡の時代に社會の紊亂するは、止むを得ざる自然の勢也。

「時」經過して、紳士の階級起るに及びて、社會ははじめて紳士的となるべし。たゞ「時」にのみ放任すれば、その成行あまりに緩慢也。時に適當なる藥を投ずることを忘るべからず。社會に投すべき藥少なからざるが中に、重なるものは、國民一般の信念を起すこと也。人情と義理とを調和すること也。家庭教育を盛にすること也。社會の制裁を嚴にすること也。文學美術を振興して、物質的、肉體的以上の快樂を附與すること也。

九品佛

東京の西郊、目黒停車場より西の方一里半ばかり、奥澤村に淨眞寺といふ古刹あり。俗に奥澤の九品佛と云ひて、いと有名也。かく九品佛といふは、本堂の前に、三つの佛堂ありて、一堂に三體づと、都合九體の佛像を安置せるを以て也。丈六の佛像、燦として、頗る偉觀を極む。その九佛を上品上性、上品中性、上品下性、中品上性、中品中性、中品下性、下品上性、下品中性、下品下性に分てり。これ佛を上下したるに非ず。その濟度するに差別あることを示せる也。上品上性の佛とは、上品上性の人を濟度する佛といふこと也。その九種の人の區別は、觀無量壽經に見えたり。その要を摘出せむに、慈心にして殺生せず、諸々の戒行を具ふる者、大乘方等の經典を讀誦する者、六念を修行して回向發願する者、いづれ

も上品上性也。必ずしも方等の經典を受持讀誦せずとも、善く義趣を解し、第一義に於て心驚動せず、深く因果を信じて、大乘を謗らざる者、これ上品中性也。因果を信じて、大乘を謗らず、たゞ無上道心を發す者、これ上品下性也。五戒を受持し、八戒齋を持し、諸戒を修行し、五逆を造らず、もろくの過患なきもの、これ中品上性也。一日一夜八戒齋を受持するか、一日一夜沙彌戒を持するか、一日一夜具足戒を持するかして、威儀缺くることなき者、これ中品中性也。父母に孝養し、世の仁慈を行ふの善男子、善女人、これ中品下性也。方等の經典を誹謗せざれども、もろくの惡業を造りて、慚愧することなきもの、これ下品上性也。五戒八戒及び具足戒を毀犯し、僧祇の物を偷み惡業を造りながら、自から莊嚴する者、これ下品中性也。不善業たる五逆十惡を作り、もろくの不善を具せる者、これ下品下性也。かく九種の區別を爲したるは、極樂に往生せむことを願はしむる一方便にして、上品上性

の人は往生し易く、下品の人は、いづれも往生し難けれども、それでも悔悟して佛を念ずれば、往生するを得べしと教へ、中品下性の孝慈の人は、浮世にては上品に入れるべきものなるが、たゞ回向發願心なきを以て中品におとしたるも、なほ往生を得べしと説きて、「心だに誠の道にかなひなば、祈らずとも神や守らむ」の歌の心にも合せり。つまり極樂往生を主として、九品に分ちたるものなるが、往生をはなれて、道德上より人の性情氣質を區別するも、面白きわざなるべし。韓退之は、性の三品、情の三品を説けり。その要を摘出せむに、仁、義、禮、智、信の五つを性の要素とし、喜、怒、哀、懼、愛、惡、欲の七つを情の要素とし、性の上品とは、五性の一つを主として、他の四をそなへたるもの、性の中品は、不全ながらに五性をそなへたるもの、性の下品とは、一の主とするものなく、他の四をも缺きたるもの、情の上品とは、七情みな中庸を得たるもの、情の中品とは、情の或物は甚だしき

に過ぎ、或物は全く之を有せざる者、情の下品とは、甚しきに過ぎたり、有せざつたりする上に、直情運行する者とせり。性と情との關係は、上性の者は從つて上情、中性は中情、下性は下情としたれど、余の考を以てすれば、中性の人が、上情なるべき筈也。

余は茲に、韓退之の三性三情を参考し、九品佛になぞらへて、人物を九通りにわけて見むとす。

聖人、上性也。賢人、中性也。善人、下性也。共に上品に屬す。英雄、上性也。人才、中性也。才子、下性也。共に中品に屬す。豪傑、上性也。勇士、中性也。猛夫、下性也。共に下品也。之を一々源平時代の人物にあてはめて見むに、上品上性の聖人肌とも云ふべきは、先づ平重盛也。上品中性の賢人肌は、源實朝也。上品下性の善人肌は、平宗盛など平家の公子に多し。中品上性の英雄肌は、源賴朝也。中品中性の人才肌は、大江廣元など、その

最も卓越せるもの也。中品下性の才子肌は、藤原信賴の類也。下品上性の豪傑肌は、源義經也。下品中性の勇士肌は、熊谷直實の如き、その類頗る多し。下品下性の猛夫肌は、ちと氣の毒なれど、唯よく兵を用るるのみにて、一大愚物なる源義朝の如きものなるべし。

先づ縦に説明せむに、上品は徳を主とし、中品は才智を主とし、下品は勇氣を主とす。横に説明せむに、上性は偉人の域也。中性は有用の材の域也。下性は凡夫の域也。下性はいづれも智を有せず。善人肌は、涙もろくして智なし。之に勇あらば、勇士の下の方に入るべし。智加はらば、賢人となるべし。學才あらば、品性もある學者となるべし。詩才あらば、所謂詩人らしき詩人となるべし。才子肌は、世才ありて智なし。役人にすれば、屬官の域也。利害にさとすぎて、却つて大利を得ず。調法がらるよこともあれば、又けんのがらるよこともあり。自分は氣を利かしたつもりにて、大に間の抜けたること多し。才あるまよに、學問

をしては一寸學者らしく見え、詩をつくつては一寸詩人らしく見ゆれども、眞の學者たる能はず、眞の詩人たる能はず。技巧は得べけれど、到底人を動かす能はず。才を抑へ、反省し熱慮するの習慣をつくれれば、十中一二は、人才の域に進むを得べし。自惚にまかせて、妄りに大望を起さぬを可とす。猛夫肌は、下層の男女に多し。蠻勇が主也。政治家の運動に使はるよによし。所謂壯士なる者也。氣ばかりは強けれども、眞の勇氣あるにはあらず。女ならば婢婦也、おてんば也。この下品下性の人は、往々中品下性の才子肌をかぬることあり。かかる人は、益々始末にをへ難し。之に善人肌が加はり、智が加はらば、眞の勇士の域に進むことを得べし。世上十中九までの人は、みな三品の下性也。學問の如何、經驗の如何、氣質の如何、修養の如何、目的の如何、諸種の感化の如何によりて、中性に進むことを得べし。次に中性の段に進まむに、上品中性の賢人肌は、宗教家、教育家、美術家、詩人に適する

性情也。下性の善人肌と異なるは、主として智の有無に由る。これに世才あらば、政治家にもなれ、實業家にもなれて、可成り上の處に進むべし。中品中性の人才肌は、才子肌に智の加はれるものにて、役人にすれば、奏任官の域也。局長ぐらゐるまでも進むを得べく、更に進んで、經驗の如何、心掛の如何、聲望の如何、閥閥の如何によりて、今の相場の大臣の椅子も得らるべし。實業家にすれば、重役になれるべし。軍人になれば、おもに參謀官に適す。世間到處に用る處多し。世に最も必要なるは、この種の人也。學者、文人、藝術家などは別にして、一般に人を教育せむには、之を標準とすべき也。天才者は、別問題也。天才は、教育によりて得らるべきものにあらざる也。下品中性の勇士肌も、その下性の猛夫肌に、智の加はりたるもの也。軍人ならば、佐官の域なるが、その人の氣質如何によりては、將官にも進むを得べし。要するに、中性と下性と異なるは、主として智の有無に由る。生れつき中

性の人もあれど、下性の人とても、心がけにより、教化により、境遇によりて、こゝに進むを得べし。とかく下性の人、眼前の境遇に制せられ易し。上品下性は、宋襄の仁に陥りて大に仁なる能はず。中品下性は、小利害にかよはり過ぎ、下品下性は、小憤小恥を忍ぶ能はずして、輕舉暴動す。いづれも皆、がさくして落ちつきなし、従つて深慮するに由なし。従つて、智は出でざる也。自惚之に加はれば、なほ更の事也。中性に至りては、大抵落ちつきたり、がさくせざる也。世俗、がさくし、ちよこくして、小才の利く少年を見れば末たのもしき人と思ふもの多けれど、これ下性の域也。ゆつたりして、落ちつきて、而かも間が抜けざる少年は、必ず中性に進み得る人也。世俗の眼に、少しどんに見ゆる處に、その後年の大智、大勇を藏する也。世俗殊に婦女子は、世才を智と誤認する者多し。智は人に見ゆるものに非ず。見えたらば、智にあらずして世才也。智に才加はりて、働きとなる。世才

が加はらざれば、分別あり、鑑識ありと云ふにとどまる。前者は能者也。後者は識者也。學校の教育は、知識をさづけて、智恵をさづけず。智恵をさづくるも、間接也。智恵は、自ら得ざるべからず。書物によりも、社會に得ざるべからず。感ずるよりも、考へて得ざるべからず。落ちつくべし、靜慮すべし、反省すべし、情を抑ふべし、虛榮心と自惚心とを去るべし。かくて眼孔高まらば、智は自から得らるべき也。

中性は、なほ教化修養に待つ所多し。上性は生れつき也。されど、中性の人も奮發すればこゝに達するを得べし。豊臣秀吉の如きは、天性の上性也。中品に屬す。徳川家康は中性なるも、自から力めたる結果、之と偉大を争ふに足るもの也。上性の人は、世に稀也。之あるも、大抵中性より進みたるもの也。釋迦、孔子の如きは、上品の上性也。日本にても、弘法大師、菅公、楠公などは、この類也。ナポレオンの如きは、中品上性の極に達したる人也。

項羽の如きは、下品上性の極に達したる人也。三品の上性は、すべて、その中性の偉大なる也。下性より中性に進まむには、智が必要なるが、中性の人は、既に多少の智あり。中性より上性に進まむには、膽力と自信とが必要也。これ仁を大にし、智を大にし、勇を大にする所以也。

以上九品にわけたるが、はつきりと一品だけの本質を有するものは稀にして、上品と中品と混ざるものあり、中品と下品と混ざるものあり。これ縦の段なるが、横の段も、或物は中性にして、或物は下性なるものあり。かく色々混合する上に、極劣等にして、九品以下の人も多く、とびはなれて、九品以外の奇人變人も多し。上中下品は、さまでの優劣は無けれど、余は、之に輕重を付して、仁を上品とし、智を中品とし、勇を下品とせり。社會は、生存競争の場なれば、勇の必要なこと、言ふまでも無し。されど競争の本體は智也。智に勇を加

へて、始めて活動すべし。さは云へ、人は情によりて動き、社會は道德によりて支配せらる。人の競争するは、方便也。求むる所は、各自が理想とする所の幸福也。智と智と争ひ、勇と勇と争ふのみにては、人類は、野獸と擇ぶ所あらず。社會を成せるは、人の人たる所以也。その動物と異なる所以也。社會を離れて、人を考ふる能はず。社會を考へむには、社會の成立しゆく所以を考へざるべからず。社會の成立しゆくは、唯道德あるを以て也。野獸は道德の動物に非ず、故に社會無し。人は道德の動物也、故に人には社會ある也。人の根本は道德に在り。智と勇とは、その方便也。耶蘇の博愛、佛教の慈悲、儒教の仁、これ人の人たる最高の品性材能のあらはれたるもの也。德を上品とするは、これを以て也。德は智を得て正しく、勇を得て進むを得べし。上品上性の聖人は、仁智勇をかねたる也。次に人は生物也。生物の生物たる所以は、活動に在り。人は活動を逞うして、はじめて甘心す。才智は、活動

する所以にして、動物の生命也。人にありては、殊に然り。才智を中品に上する所以也。勇は、才智を實行する上に必要なるものなれば、いづれかと云へば、智よりは少し輕し。これ勇を下品とせる所以也。三品は唯分量の多少に由る。全く勇を缺きたる英雄もなく、全く智を缺きたる豪傑も無く、全く智勇を缺きたる聖人も爲し。人の事多く、人の用多く、従つて人の材能は多けれども、土臺となるは、涙也。涙とは、婦女子が悔しがりてこぼすものゝ謂に非ず。意志弱きものが不遇にこぼすものゝ謂に非ず。實に物をあはれむ情也。この涙なくんば、眞の豪傑にはなれず、眞の英雄にはなれず。聖人はなほ更也。ナポレオンは、才智の頂上に達したる人也。されど涙なし。歐洲を蹂躪するも、歐洲を併呑する能はず。頂羽は豪傑の頂上に達したる人也。されど涙なし。天下を破壊するも、天下を得る能はず。智には智の敵あり、勇には勇の敵あり。獨り仁者には敵なき也。人は涙なかるべからず。即ち誠實

ならざるべからず、眞面目ならざるべからず。これ人が世に處する第一の心得也。唯、形はいろくにくづして可也。全く形をくづす能はざるものは、窮屈となり、杓子定規となり、馬鹿正直となり、迂闊となり、村夫子的となり、道學先生的となる。之を心にくづすものは形美なるも、賤むべし。僞善家、山師、似而非豪傑、翩翩たる輕薄才子の類、これ也。人發達を欲せざれば、則ち止む。發達を欲せば、心に涙ありて眞面目なるべし。學校は、知識を得る處也。卒業して世に處するは、智惠の學校に入る也。人は、一生學生也。慢心すべからず。自惚と虚榮心とを去りて、おちつきて、靜慮し、反省して、智を得べし。更に進んで、自信に動き、膽力にとどまりて、大智、大勇、大仁を得べし。これ人物の發達する方法也。

冷汗録

一

朝未だ起き出でざるに、巡査來りて曰く、昨夜路に書物の包みを落さざりしかと。室内をさぐるに、書物のつよみなし。落せりと答ふれば、中には、如何なる書物があると問ふ。これこれと、七八冊の書名を云へば、さらばとて、余にわたしくれたり。つくづく前夜の事を考ふるに、學校の歸路、直に富士見俱樂部にて催せる平石氏人氏の結婚披露會に赴く。その歸路、大に酔ひて、ねむくなり、書物包を枕にして、路ばたに眠りしことを思ひ出したり。さめて歸りたるも、書物包は、そのまよに置きわすれたりと見ゆ。仕合せにも、巡査拾ひて書物を檢するに、多くは高等學校にて借りたるものにて、高等學校の印あるもの多かりけれ

ば、さては高等學校の學生が落せるならむとて、その近傍の紙屋に行き、この邊より高等學校に通ふものなしやと問ひしに、余はたび／＼その紙屋に買ひにゆき居りて、而かもその附近、他には高等學校に通ふものなかりければ、紙屋にては、よく余を覺え居りて、余の居所を告げよれば、斯くは、もて来てくれたるなり。なほ、さぐるに、眼鏡なし。昨夜路傍に眠りし時、はづし置きて、覺めたる時忘れたるものと覺ゆ。巡查の目にも入らざりしと見えて眼鏡はもて来てくれざりき。これは明治二十三年の春のこと也。

二

土井晚翠、海外より歸る。その祝ひの會を下谷の伊豫紋に開く。その日、他にて五六合のみて、一寸酔ひて、之に赴く。更に飲みて大に酔ふ。ウイスキーをも二合あまり飲みたり。眠くなりて、室の隅に横になりしことは覺ゆ。ふと眼をさませば、せまき部屋に、昨夜の服

装のまよにて、獨り臥せり。自家にもあらず、料理屋にもあらず。待合らしき家のつくりざま也。如何に考ふるも、どうして、こよに來りたるかど分らず。問はむに、人なし。枕元をさぐるに、眼鏡なし。起つて廊下に出でよ、そこよ歩くに、夜は白みかけたり。女中を起さむは氣の毒なりと、ひきかへさむとするに、一室の中に、咳ばらひの聲す。さては、女中は、目をさまし居るなりとて、手を叩く。女中出で來る。昨夜の始末を問ふに、十二時頃、一同、伊豫紋をひきあけしに、余起きず。玄關まで、引きずり來るも、なほ正體なし。料理屋に客をとめることは出來ず。余の家は二里餘りも隔りたれば、車にて送らむも不安心也。宿屋は既に戸をとざしたり。かゝる時に都合よきは、待合なりとて、某々の二氏、余を車にのせて、こよに來り、明朝まで預つてくれと頼みたりとの事也。その某々は、いづくにかあらと問へば、昨夜既にかへられたりと云ふ。さては、余は荷物同然、一夜だけ、待合にあづ

け置かれたる也。直に辭し去る。これは明治三十七年の冬のこと也。

三

夜半、戸をたよく者あり。起き出づれば、春浪と止水との二人也。燒酎一本を手にする。門既に志まり居りければ、車夫に命じて、垣を越えて、中に入りて、門を開かしめたりといふ。午前三時頃まで飲む。止水まづ眠り、春浪も眠る。余も眠る。朝おきて、また春浪と飲む。止水、用ありとて去る。飲んで、午後二時に至る。春浪曰く、これより宮崎來城を訪はむと余諾して共に往く。三人鼎坐して飲む。大に酔ひて、來城と二回ばかり、角力とりて、ころころと投げられたることは記憶に存す。夜半辭し去る。來城、四五丁送り來りしが、之を斷りて、春浪と二人、千鳥足にたどりゆく。春浪、ふと羽織をぬぎて、余にやらむといふ。われ辭す。強ふ。うけず。春浪、さらば余にも不用なりとて、まるめて、畑の中になぐ。余行

いて、拾ひ來りて、春浪にわたさむとす。うけとらず。そんならば、余にも用なし。なけてもよきか。どうでもせよと云ふ。こんどは、余、その羽織を、なけすてたり。ゆくこと五六町、眠くなりたれば、草の上に仰臥す。背は夜露に、びつしよりになる。春浪、余を起さむとて、地上にひきする。著物の志めに、土つきて、泥まぶれになりたり。かくすること三四回、やうやく眠氣減りて、春浪にわかれて家に歸る。これは明治三十八年九月中旬のこと也。而して今や已に春浪なし。當年を追懷して、覺えず涙くだる。

面白き活劇

苟くも、一種の觀察眼を以て見れば、匹夫匹婦のごたく、騷ぎにも、一種の趣味なしとせず。されど、吾人の思想より數等下りたる思想を有して、むしろ動物に近き人の活劇は、吾

人は唯氣の毒と思ふの情に堪へず。それを研究することには、趣味を感ずれども、かゝる活劇その物には、さつぱり快感を得ずして、却つて苦痛を感ず。世上もし之れに快感を得るものあらば、その人は、所謂彌次馬の類也。小兒になぐりあひをなさしめて、ほくく笑ふの癡漢とえらぶ所あらず。吾人が今の世の詩人小説家に嫌らざるは、かゝる癡態を演出すれば也。演劇も、大抵これに類す。よしや、大人物を取りて、その筋も大活劇を演ずるものありとするも、之れを演ずる俳優の人格、低く且つ小なれば、つまり傀儡の動くに過ぎず。吾人は、小説演劇などよりも、却つて偉人の傳記の中に、小説よりも面白き小説を看、芝居よりも面白き芝居を看る也。

茲にその一例として、近世の英雄藤田東湖に關する一場の出來事を、筋立てて見むに、米艦渡來以後、開港と云ひて、攘夷と云ひて、海内鼎沸せし際、水戸の烈公、天下の重望を負ひ、幕府に對して、一敵國の觀を爲せり。その下に、藤田東湖といふ英雄ありて、之を輔け、天下の志士に尊重せらる。一方にまた山内容堂公といふ才物あり。その下に、吉田東洋といふ英雄ありて、之を輔けしこと、なほ東湖の烈公に於けるが如し。東湖の名は、當時になりわたり、今にも傳はりて、歴史上の一偉人と目せられ居れど、東洋の名は、一般には傳はらず。されど、その人物を想像するに、學あり、智あり、膽もありて、優に宰相たるだけの材を有せしなるべし。その心術の如何は知らず。唯政治家としては、東湖の友たるに恥ぢざる人なるべし。而して、現に二人は朋友也。容堂公、東湖に逢はむと思ふこと切也。吉田往いて之を東湖に告ぐ。東湖諾す。されど、其言を履行せず。かくの如きこと再三也。單に表面より見れば、東湖は食言者也。されど、東湖の心中を想像せむに、東湖は、土佐藩の臣にあらずして、水戸藩の臣也。之を呼ばむに、それ相當の呼方があるべき也。我主人が君に逢ひ

たがつて居るや、だから、来て逢つて呉れただけでは、おいそれと往かるべきものに非ず。山内方にても、それと悟りて、こんどは、小南五郎右衛門を使者として遣りて、正式に招待せり。東湖、直に招に應じてゆけり。面白き活劇は、これより始まらむとす。

東湖が容堂公の邸に赴きたりし日は、吉田は事故ありて、同席するに由なかりき。舞臺にあらはれたる大立物は、容堂公と東湖と小南との三人也。茲に一寸、この三人の風采性格を想像せむに、容堂公は、當時の三百諸侯中、有数の人物也。才と氣とを以てまされる人也。されど、普通の才子よりは上にて、智もありたり。さまでの膽力なく、氣宇はせまけれど、わけのわかりたる人にて、才と氣とをふりまはして、政治家としても、手腕のありたる人也。その相貌も、ゆつたりとした處は無く、尊けなる處もなけれど、口元は志まり、眼はりよし、鼻は高く、よろづ、きかぬ氣が逆れるなるべし。東湖は、豪傑肌の偉人也。眼はすわり

て、威嚴ありて、志かも猛からず。筋骨たくましく、ゆつたりと落ちつきて、音吐大に、天空海闊の氣、自から眉目の間にほどばしれるやうに思はる。小南は、廉直にして思慮あり、六尺の孤を託するに足るべき國士也。やさしき目付なるも、口はよく志まり、顔は長き方にて、頭は禿けて居りさう也。

志ばしが程は、この三人の間に、種々の對話がありたれど、看客にはきよとれず。終りに容堂公、東湖に向ひて、今時の大名は、どんな事してよきかと問へば、御謀叛くと大笑して答ふ。酒宴はじまりて、容堂公の顔、先づ赤くなり、口も大に軽くなりたり。小南に向ひて、戦國時代の群雄に比すれば、我は誰に似たるぞと問ふ。小南しばし考へて、さればにて候。毛利元就に似させ給ふと存すと答ふれば、吉田ならば、そのやうな馬鹿な事は言はじ。必ず織田信長に似たりと云ふならむとて、立腹のさま也。容堂公は、元就に似たる乎、信長

に似たる乎、試に余の臆斷を下して見むに、信長は、元來天才的人にて、癩癩もち也。氣は小さく、膽も小さく、度量もなく、遠謀も無く、才氣は非凡にて、涙なく、従つて猛烈なる人也。とても天下を取り得べき大器に非ず。之に反して、元就は、優に天下を取り得べき大器をそなへたり。危を冒して、一夜に、われに數倍の兵力を有せる大敵陶晴賢を倒すだけの膽略あるかと思へば、又ゆつくり七年かよりて、衰弱せる尼子氏を亡ぼすの深慮もあり。智あり、勇あり、權謀もあり、文學のたしなみもありて、徳川家康に比して、まさる所ありとも、劣る所は無き人也。余は信長よりは、元就を偉なりとする者なるが、容堂公がそのいづれに似たるかは、余れ斷案を有せず。唯想像するに、容堂公が才氣すぐれて元氣なるは、信長に似たり。その度量のひろからぬことも相似たり。されど、信長の如くは猛烈ならず。文學の才あり、智略もあるの點は元就に似たり。言はど、信長と元就とを打して一丸となし

て、やよ小さくしたるもの也。東湖も酔ひたり。何とも當否を言はず、唯笑つて、「お若いお若い」と云ふ。その言の如く、眞に容堂公は、東湖などに比ぶれば、まだお若い人也。東湖が如才なき人ならば、唯腹の中で笑つてすますべけれど、氣骨ある人なれば、之を口にしたる也。容堂公のお若き證據は、その言を聽いて、立腹せり。「それなら、われと腕押をやらう」といふ。こよに至りて、益々若し。されど、無邪氣にして罪なし。大名としては、元氣愛すべし。東湖は腹中にて、豎子なほ教ふべしと思ひしなるべし。その容堂公が戦を挑みたる東湖は、如何なる人ぞと云ふに、武藝にもすぐれたる人也。公は、到底その敵に非ず。若し東湖にして勝たむ乎、公は益々くやしがるべし。土佐藩の恥辱也。君辱しめらるれば、臣死す。氣早き土佐人士の事なれば、如何なる騒動を起すかも計られず。東湖の事なれば、死は辭する所に非ず。且つ多數の敵を破つて身を全うすることも、必ずしも難からず。されど、かよ

る一小事に騒動を引起すは、餘りに無謀也。さは云へ、わざとまくるは、替間の事也。丈夫の爲すべきことに非ず。流石の東湖も、志ばし考へたりしが、終に男らしく思ひ切つて曰く「お相手仕らむ。」

いよく小南が、立役をつとむべき機は到れり。東湖に向ひて一喝して曰く、「今日、先生をお招き申したるは、御教をうけむため也。然るに、そのやうな匹夫の爲す事をせらるゝは何事ぞ」と。一言堂々、さすがに、小南は凡庸の人に非ず。千里に使用して、君命を辱しめざる底の人也。もしこれが、尋常の婦女子ならば、はじめ容堂公が腕押せむと言ひ出したる時それは大變也。必ず負けて恥をかよるべしと思ふ心が先にたちて、あわてふためきて、「およしあそばせ」と、容堂公をなだむるかも計られず。公は、言ひ出したることを、後にひく人に非ず。又大名の身として、一旦言ひたる以上は、如何なる事ありとも、およさうかと引込

ますべき筈のものに非ず。もし公をなだめて、公をしてその言を引かしむれば、これ公をして恥かよさしむるもの也。されど、東湖は剛毅なる人也。わざと負けてくれるやうな人に非ず。腕押すれば、公の負くることは必定也。如何はせむと氣をもむの餘り、平生の思慮もどこへやら、たどほうとするが、凡庸の人の常也。然るに、小南はあわてず、さわがず、靜に東湖の答を待ちて、その相手せむといふや、電光石火、間、髪をいれず、一叱して、東湖をへこます。實に大出來の藝也。拍手喝采の聲、満場に起るべし。

小南が味方の主君をなだめむとはせずして、之を敵にむけたるは、喧嘩を仲裁するに、その宜しきを得たるもの也。酒座などにて、いざ、なぐりかよらむといふ場合などに、少し智恵のある人ならば、兇器の有無により、事柄の如何にもよれど、打たむとする人よりは、うたれむとする方を抱きとむべし。少しぐらなるがらして、よき事もあれば、もし味方の打つ

人が、力よければ、敵を庇護する風して、力を添へて、なぐつてやるべし。力を添へずとも、敵の邪魔して、味方をして氣がすむだけに、なぐらせるべし。されど、あわつるものは唯なぐらせじと、味方をだきとむるが常也。かゝる人は、容堂公對東湖の場合にも、唯あわてよ、味方の主君をとどめむとするなるべく、味方を助けずして、却つて味方の邪魔する也。

斯く小南に叱られて、東湖は、何と答へたるかは、また看物也。東湖は、座をすさりて、洵に悪かりきと頓首して謝罪す。これ凡眼者の徒の喝采せざる所なれども、流石は東湖也。この場中、第一の上出來の藝也。世上凡庸の徒は、一概に負けるは恥也、罪を謝するは恥也とのみ思ひこみて、實際負けて居りても、負けたと言はず。悪いことしたと自覺して居りても、あやまつたと言はず。所謂負惜がつよきものなれど、これ負けるよりも、負けたといふ

よりも、一層上の恥辱也。負けるは、恥のやうなれど、立派に負けるは、男子的也。負けたら、負けたと言ふが、男子的也。決して眞の恥辱に非ず。唯負惜をいふに至りては、女々しきわざ也、眞の恥辱也。かゝる人、婦女子に多し。男の中の女とも云ふべき小才子、小人の輩にも多し。修養せむとするの士、意をかゝる處に用るよ。碁や、將碁や、カルタや、かゝる修養に關して、大に裨益あるもの也。勝たむと思ふ心は、盛ならざるべからず。されど、負けたら負けたと思ひきるべし。更に勇氣を起して、捲土重來を期すべし。辯解し、口惜しがり、負惜をいふは、甚だ見苦しきわざ也。とかく匹夫の根性、わがよき事は知れど、悪き事は知らで、先輩に諭され、叱られても、唯くやしとのみ思ひ、あやだ、かうだと言ひわけのみして、容易に悪かつたとは言はざるもの也。少年の人にして、父兄、もしくは教師、もしくは朋友に戒められて、單にあやまつたと云ひ、人と議論して、負けたら、負けたといふ

ものあらば、その人は、必ず修養して、賢人の域に達すべきもの也。東湖の場合にも、負惜のみ云ふ没分曉漢ならば、必ず言ひわけすべし。實際、東湖は小南に叱らるゝ程の過失あるに非ず。されど小南の心中を思ひやりて、敬んで謝罪したるは、實に男らしくして、大人物の度量也。表面には、叱る、あやまる、極簡單なやうなれど、その底に底あり。決して眞に叱りたるに非ず、眞にあやまりたるに非ず。とても凡人同士にては出来ざる藝當也。謝罪したる東湖が、この場中、第一の役者也。東湖を叱したる小南は、その次の役者也。容堂公はこの二人に比して、貫目遙に輕し。元就と言はれて腹立ち、若いと言はれて癢にさはるまでに、若い容堂公の事なれば、小南が東湖を叱りつけて、溜飲を下し、東湖が謝罪して、胸がせいくせしなるべし。

東湖が謝罪したる後、座があらけたり。東湖、忽ち氣轉をきかして、拙筆を揮ひ申さむとて、紙筆を乞ひうけて、

容レ衆者、人君之徳也。

とかきて、座興を添へ、かねて、あくまでも人を教へむとするの態度を示せり。賢なる哉。容堂公その勁拔なる筆跡を賞し、小南はじめ一同の感歎する聲中、幕下り、面白き活劇、ここに終れり。

注意して、この活劇を見よ。而して、事件の裡に磅礴せる英雄の心事を洞察せよ。智あり勇あり、頓才もあり、眞の男子的意氣地も見ゆ。之が腹からわかれば、大勇自から生ずべく、智も生ずべし。唯容堂公の藝、一寸面白けれど、立役者の藝にはあらず。氣を負ひ、才を負ひ、従つて度量せまき人の事なれば、元就と言はれて立腹せしは、さもあるべし。東湖の所謂お若いゝ也。幼稚園の生徒に、學問は教へられず。かくては、とても人君たる能はざる

也。人君は、虚心平氣にて、臣下の言を容れざるべからざる也。お若いと云はれて、さらば腕押せむと云ひたるは、素人うけのする藝なれど、小役者の域也。人格大ならば、さらば、先生の教をうけむと、まづ氣を大きくして、さう見ゆるか、はよあと呵々一笑すべく、かくて、はじめて、大役者の藝也。素人受のせざる所に、その人物の大きが見ゆる也。

されど、容堂公が、容堂と號したるは、東湖の言を容れたる也。のち、容堂公、詩あり。

容レ衆人君徳、大聲向レ吾言、其人今安在、一逝杳ニ英魂、

これ東湖を偲へる也。容堂公の一生は、亦檜舞臺の役者也。

婦人七去の説

世に、婦人の七去といふ事あり。それは、如何なる事ぞといふに、女大學に説明して曰く、

「婦人に、七去とて、惡き事七つあり。一には、舅姑に順はざる女は、去るべし。二には、子なき女は、去るべし。これ妻を娶るは、子孫相續の爲めなればなり。然れども、婦人の心正しく、行儀よくして、妬心なくば、去らずとも、同姓の子を養ふべし。或は妾に子あらば妻に子なくとも、去るには及ばず。三には、淫亂なれば去る。四には、恪氣深ければ去る。五には、癩病などの惡き疾あれば去る。六には、多言にて慎なく、物言ひ過すは、親類とも中惡くなり、家亂るよものなれば、去るべし。七には、物を盗む心あるは、去る」と。この七去の出處は、小學に在り。それを直譯して見むに、「婦に七去あり。父母に順はざれば去る。子なければ去る。淫なれば去る。妬なれば去る。惡疾あれば去る。多言なれば去る。竊盜すれば去る。」これ也。

この七去のみを見れば、如何にも、男の方のみが得手勝手にして、女があまり、かはいさ

うなるが、女大學は、もと女のみの教也。故に女の方の事のみ云ひて、男の方の事を云はず。小學は、男女に通ずる教なれば、男の方の事をも云へり。即ち七去について、直に三不去を説けり。一に曰く、取る所ありて、歸る所なければ去らず。二に曰く、共に三年の喪を更へたるは去らず。三に曰く、前に貧賤にして、後に富貴なれば去らず。これ男を戒めたる也。されど、去る、去らぬは、枝葉の問題也。根本の問題は、その始をつよしむに在り。凡そこれ聖人が、男女の際を順にし、婚姻の始を重んずる所以なり」と説きて、一章を結びたるは、聖人の教、さすがに抜かり無き哉。男子が七去を楯にとりて、三不去を犯すも非なれば、女子が三不去を楯にとりて、七去を犯すも亦非也。

小學は、支那のむかしの教也。女大學は、日本の封建時代の教也。然れども、その教の精神は、之を今の世の夫婦の道に應用して、毫も無理なることあらず。先づ三不去の理由を説

明せむに、第一の、「取る所ありて、歸る所なし」とは、妻を貰ふ時には、妻の家が立ち居りて、後につぶれたる也。つぶれずとも、生活にこまり居る也。そのやうな中へ、妻をかへすは、人情の忍びざる所なれば、憐んで去らざる也。第二の、「共に三年の喪を更ふ」とは、三年間、親の喪にこもりたる也。まことに喪にこもるなら、金魚は生まぬ筈也。金魚とは「も」(喪、藻)の中に生れたる子といふと也。かくまで、親の爲めにつくして呉れたる妻なれば、人情之を去るに忍びざる也。第三の、「前に貧賤にして、後に富貴なり」とは、妻を貰ふ時、我身が貧賤にして、のちに出世して、富貴になりたる也。貧賤の中をこぎあけて來りたる妻なれば、若い盛りに憂き身をやつし、芝居も見ず、寄席へも行かず。よその細君は、綺麗な著物を著れども、その身は、きたなき著物のみを著て、夫の爲めに、せつせと働き、借金の言ひわけもすれば、質屋へもゆき、苦しい思のみせしなるべし。されど、男はうはき也。金が出

來れば、もそつと、よき妻をとの心もきざすべし。『糟糠の妻は、堂より下さず』とは、頂門の一針也。さらでだに、人情新しきを喜ぶ。如何なる美人も、常に見ては、さまで美ならず。殊に多年の貧苦に、身はやつれ、水仕事に手があらくなり、その上にも、子を生み、年をとれば、若き時の美は、全くうせはつべし。それがいや也、目ざはり也。女房と疊とは、新しきに限るといふやうな考を起すは。夫としての不徳義也。とかく人は、金まはりがよくなれば、うつり氣がするものなるが、それでは、妻たる者は、やる瀬なし。むかしの事を忘るなと、いたく男を戒めたる也。

三不去の教は、女に對して同情を表したる也。否、人情ある夫は、誰もかくあるべき筈のもの也。夫たる者は、三不去の精神を、腹から了解して居らざるべからず。

七去の方は、おもに女を戒しめたる也。男に向つて、去れと、そよのかしたるに非ず。去

らるゝことがある故、身をつよしめと、ころばぬさきの杖、去られぬやうにせよとて、うはべは、女に向つて残酷なるやうなるも、實は矢張り女に同情を寄せたる也。

七去の字面にのみ拘泥して、その中の一箇條の缺點あるものを去るは、あまり常識なきわざ也。七去のやうな行をなすなと、女を戒めたるものと解釋すべき也。七去と云はずして、七失と云ひても可也。

茲に少し七去に脚注を付して見むに、『惡疾』とは、女大學に説明したる如く、癩病などの事也。現に癩病にかゝり居れば、誰も貰ひ手なし。されど、嫁して、癩病になれば、夫を苦しめ、その一家をなやまし、之を其子孫に遺傳す。人情の忍びざる所也。人道を解するものは、癩病の遺傳ありと知らば、男は妻をもらはぬやうにし、女は嫁せぬ覺悟すべし。それをつよみかくして、婚禮するは、人道をわきまへぬわざ也。中には、本人は、それを知らずし

で、あとであらはるよことあり。かよる時は、天運とあきらめざるべからず。遺傳といふものは、恐しきものにして、子をさしおいて、孫に及ぼすことあり。妻は一生健全なりとも、生める子が遺傳をうけては、かはいさう也。悪疾ある者を妻にせぬとは、人情さもあるべきと也。日本にて結婚するに、血筋をやかましく云ふも、尤もなる事也。それが一地方ならば、わかり易けれど、各地方の人の集まり來れる大都會にありては、容易に詮索がつかず。されど、皮膚色澤などを吟味すれば、癩病の血筋なりや否やは、大抵見當がつくべし。貰つて去るは、おそし。もらはぬ前に、十分に詮索し、吟味すべき也。

次に、「盗みをするものを妻にせぬ」ことも、何人も異議なかるべし。されど、里方が生活に苦めば、妻がこそく里方に貢ぐためし、世に少からず。その行は非なれども、その心情は察してやらざるべからず。妻をして、かよる非行をなさしむるは、つまり夫の不人情の致す所也。里方がこまれば、夫たる者、之を助けてやらざるべからず。然るに、夫たる者、冷酷非道なるを以て、いくら哀を乞ひても、詮なきより、かくは、ひそかに里方にみつぐべければ、その歸する所、夫もその一半を分たざるべからず。妻をして、かよる行あらせたくなきもの也。それにつけても、夫たる者をして、利慾一方にのみ偏せずして、人情を解せしめなきもの也。ともかくも盗みするは、悪事也。盗みする人とは、同棲すべくもあらず。

『多言』とは、たゞ、志やべることには非ず。無口の女がよしとは非ず。人に對し、客に對して、挨拶をよくし、愛嬌をふりまくは、妻に必要なこと也。愛嬌を振りまき過ぎて、下品になりても不可なれども、當りさはりが無く、而かも趣味ある事なら、多く喋べるが、却つて好ましき也。されど、姑に對する不平を里に洩し、夫に對する不平を鄰の細君にもらし、子供の前にも毒舌を吐き、下女下男を相手にして、人の悪口を言ひ、淺はかなる智恵

を以て、軽々しく人を是非し、よろづたしなみ無く、妄りに噂を信じて、之に想像を加へて言ひふらし、妄りに中傷の言を發し、氣にくはぬことあれば、怒鳴りちらし、叱らるれば、必ずくやしがりて罵りかへし、いつも出しやばりて、餘計な事を云ふが、所謂多言なる也。去らざるまでも、斯る女は、紳士の妻たる資格なし。そんじよ、そこらの裏店の山の神たるべきもの也。ならうことなら、かゝる女は、妻とせざるが、夫の得策也。

『子なき妻を去る』とは、一寸聞けば残酷なれども、古來、東洋では、家を重んじたり。子なくして、家斷絶するは、父祖に對して、申譯なし。子を生まぬ女は、妻としての資格を缺きたるもの也。否、女としての資格を缺きたるもの也。動物を通じて、女性の子を生むべき筈のもの也。下等なる動物は、唯生みさへすれば、それで子は育てど、高等なる動物に至りては、生みたる上にも、なほ乳を與へて、之を育つ。人に至りては、衣食を與ふるのみにては

不可也。之を教育せざるべからず。かくて、はじめ、眞に子を生むといふべき也。女子の天職は、此の如くに子を生むに在り。故に女子は、身體の強壯なるが、第一の要件也。次に常識をそなへ、ひと通りの知識をそなへ、義理と禮儀とをわきまへて、よく子を教育するが第二の要件也。今の世、子の無き妻を去るやうな不人情の人は無し。むかしとても、必ず去りたるに非ず。養子を貰ふなり、妾を置くなりしたるもの也。家族本位の國柄にありては、さもあるべきこと也。個人本位の國柄にありても、子を生まざるは、女子の天職を缺く也。單に生むのみにては、眞に生みたるに非ず。夫の體強きに、妻の體弱くして、虛弱なる子を生み、若しくは子の體つよきも、無學無智にして、常識なく、作法も知らずして、子を教育する能はざるものは、やはり子を生まざるもの也。子は、おもに母の感化をうく。賢人の母は、必ず賢母也。妻を貰ふ時は、おもに、その容貌のみが目につけども、子をもちたる後は

も少しわけの分りたるものを貰ひたらばと思ふもの多かるべし。貧乏所帯をふりまはし、晴れの衣裳を著て人に見せびらかしたき頃は、子の無きが、結局氣樂と思ふ女もあるべけれど、老いてのちは、子が多ければ多き程、心配もあるべけれど、また多くの慰藉を得るもの也。子は澤山生んでおくべきもの也。親に心配かけるやうな子は、わが教育の足らぬ故とあきらむべき也。

「父母に順はざるものは去る」とは、家族本位の國柄にありて、尤も千萬の事也。殊に武家時代にありては、なほ更の事也。祖先以來、大名に事へて、その身も年久しく事へたる事なれば、武士の心得作法は斯くぞと、頭に志み込み、その家庭に於けることも、ほど一定し居れり。若き夫婦は經驗未だ足らず、よろづ親に順はざるべからず。何事も家風に從へば、それで妻の道が立つ也。然るに、人情、君に忠なるよりは、家に忠なり易く、親孝行よりは、

女房孝行になり易きもの也。武士にして、愛に溺れて、父母に順はざるやうな、たしなみの無き妻を置くは、よほどの無分別者也。忠孝は、日本の道德の粹也。かくて、大義、親を滅する、高尚なる域にも進み得る也。今の世にありては、家祿を相續することやまりて、いろいろ適する職業にて身を立てざるべからず。父が醫者だからとて、醫者に適せざる子を、無理に醫者にするは非也。子が實業家となり居れるに、親が一概に武士氣質を以て、之を律するも非也。殊に西洋より種々の主義も風俗も入り來りたれば、徹頭徹尾、武士風をふり廻さむとすべきに非ず。かくて舊思想と新思想と衝突し、姑と嫁と仲が悪き例、世に多し。武士風の教育をうけたる女が町家にゆくか、町人の娘が武士風の残れる家に嫁ぐかすれば、よろづに感情の衝突あるべし。こは、今の如き過渡時代に免るべからざる所也。時代が進みて、武士のかはりに、紳士といふ階級起らば、自然に衝突も無くなるべけれど、妻たる者、毫も

志つけなく、氣隨氣儘のものにては、夫の親を厄介視して、家庭の和樂を缺く。かゝる妻は紳士の妻たる資格を缺くもの也。われは、將來親たらむものによむ、子をそだてあけて、一人前の人にすれば、それで、親の役目はすみたるもの也。その上は、餘り干渉せざるやうにすべし。されど、子たる者と、その子の妻たる者によむ、孝の觀念は、あくまでも失ふべからず。日本にて、孝の事をやかましく云ふは、これ西洋の道德よりも、日本の道德が進み居る所也。父母に順はざる妻は、今の世にても、私利私慾のみ強くして、氣隨氣儘なる女也。去らざるまでも、紳士の妻たるべき品性なき女也。

『淫なれば去る』は、尻軽き女のこと也。淫なるは生れつき也。夫も好色なれば、似たもの夫婦にてよきやうなれど、淫婦では、長き留守は守りかねるべく、後家も立てられざるべく、夫もし弱ければ、早世させるべく、弊害百出す。されど分別ありて、克己心に富めば、さま

での害は無し。淫婦か否かを判別するに、古來いろくなる言傳へあり。或は曰く、目尻のさがれるものは、淫亂なり。或は曰く、髪の毛のちぢれたるものは、淫亂なり。或は曰く、上下の目ぶた、ふくれて、はれほつたき目のものは、淫亂なり。これらは、たゞ言傳へ也。必ずしも、あてにはならず。かゝる相を有するものは、たとひ淫亂ならずとも、好き相には非ず。又、淫亂といふ中にも、色は、さまで好まずして、唯、男を好む女もあり。又、意志弱きが爲めに、誘惑を拒む能はずして、淫亂らしく見ゆるものあり。すべて、女の尻軽きものは、厄介なるもの也。

『悋氣深ければ去る』も、また一理あること也。世の皮相者流、動もすれば曰く、深く夫を愛するが故に、悋氣を起す也。妻は夫を愛すべき筈也。然るに、愛より出でたる悋氣をとがむるは、餘り残酷なりと。成程、愛は女の生命也。愛か女乎、女が愛乎。如何なる毒婦も、

必ず愛には、もろきもの也。否、悪人なれば、悪人なる程、愛にもろきもの也。他人の子は、ぶんなぐるも、自分の子は、喰ひつくやうに愛する也。姑や、小姑に對しては、鬼のやうな心を有するも、己れに甘き夫は、喰ひつくやうに愛する也。善人とても、愛せざるには非ず。されど、善人は、自愛の外に、他愛の心も深し。小人は、つゆ他愛の心なくして、自愛の心のみを有す。己を愛すること甚し。とても、君國の爲めに、一身一家を擲つといふことは出來ず。他に對しては、心きはめて冷也。それも、藝者や、町人の女房としては、經濟上、大に都合よきこともあれど、そのみにて押通しては、道德上の惡魔也。人にうまき汁をすはるよお人よし、よしとはあらねど、方便は方便也。心中、毫も慈悲の心なきものは、人として劣等なるもの也。かゝる女は、唯利己の心よりわり出して、我身の分身なる子を愛すること、深きに過ぎて、却つて子の教育をあやまり、己れに都合よき夫を愛して、毫も敬意

を有せず。その愛するは、眞に、その夫を愛するに非ずして、つまり己れを愛する也。まことに夫を愛するならば、普通の人情、少しぐらゐの悋氣は起るにしても、夫の顔に、どろ塗るやうなことはせざる也。やくにしても、たしなみの如何によりては、夫もかはいさうと思ふべけれど、夫の胸倉をつかまへざるまでも、怒鳴りちらし、ふて腐つては、毫も貴女のたしなみは見えず。かくて、妻が、ふてくさるれば、夫は家において、惡魔の住家にある心地すべし。すべて、やく女は、夫が、たゞ他の女と深切に話してさへ、はや、嫉妬の刃をみがくもの多し。男の悋氣ぶかきは、男だけに、女よりも亂暴にて、刃をふりまはして、輕きは髪を切るに止まれど、大抵、女を殺すためし、下等社會に少なからず。嫉妬は、浮世の大罪惡也。畢竟するに、悋氣ぶかきは、夫を敬することを解せずして夫を愛し、夫を愛せずして、唯己を愛するより出でたるわざ也。たしなみ無き女也。私利私慾の傀儡也。場合によ

りては、焼餅やくも、尤もなることもあれど、かゝる女は、焼餅やく場合なしとしても、自己中心の人にして、毫も物のあはれといふことを知らぬ女也。その下司の根性が、思はず知らず、焼餅やく場合にあらはれたる者也。焼餅やくことは別にしても、その根性のきはめていやしきを知るべし。去らざるまでも、紳士の妻としては、頼もしからぬ女也。

茲に志ばらく、女の身の方の事を考へて見むに、女は、一生の苦樂を、夫に託するもの也。夫は、女の保護者也、神也、佛也。夫に財産あり、智慧もあり、働きあり、身體壯健にして己れを愛してくるれば、女は、それで、世に安心立命する也。これ、女の生命也。かくて、夫は、女にとりては、神也、佛也。男は、女を愛してやらざるべからず。即ち、女の爲めに神佛となりて、女をして往生させてやらねばならず。されど、愛すれば、つけあがりて横著になるものなれば、そこは、また、男の智慧にて、狎れさせぬやうにせざるべからず。これ

夫たるものと、第一に覺悟すべき所なれども、智勇一世を蓋ふ英雄も、女には、のろくして、女をして、つけあがらしめ易し。此の如きは、夫も悪き也。夫婦の要は、夫は妻を愛すべし。むしろ憐むべし。妻は、夫によりて安心立命を得べし。夫を敬すべし。愛に狎るべからず。焼く、焼かぬといふ表面の事は、さしおきても、格氣深きは、愛に狎れて、自己中心をふりまはす我儘者也。焼くことによりて、その陋劣なる心事が見えたるが、焼く場合なしとして、かゝる女は、己れの爲めに、夫を愛する也。眞に夫を愛するに非ず。氣に入れば、喰ひつくやうに夫を愛すれども、怒り、もしくは恨めば、心中にては、刃を夫の身に加へ居る也。恐しや、恐しや、外面如菩薩、内心如夜叉とは、古の聖人が、女のかゝる根性を見抜きたる也。誤解する莫れ。余は遊蕩兒の爲めに、焼く妻を咎めたるには非ず。たまく、焼くことによりて、むき出しになりたる、女の陋劣なる根性を咎むる也。かゝる女は、必ず姑につらく

當る也。その根性を、表面には出さずとも、腹に有し居り、つゆ、慈悲といふことを解せざる女也。

父母に順はざるも、妬あるも、歸する所は、つまり一にして、自己中心の我儘なる根性を有して、よしや、その顔は可憐なるも、その心は鬼也。平生は、その心をつよみかくすも、嫉妬の場合には、覺えず、知らず、之をむき出しにして、不貞くされる也。

前にも云ひたる如く、七去は、必ずしも去れとは非ず。おもに女を戒めたる也。娶りて去るは、おそし。去らざるやうな良妻を娶れ、去らるゝやうな事をするなといふが、七去の精神の存する所也。

西洋の思想、風俗、入るにつれて、何事も西洋がよしと思ふもの多けれども、道德の點に至りては、西洋人が動物に近く、日本人が神に近きこと多し。夫婦相和する道の如きも、妄り

に西洋人の皮相を學んで、動物の域に陥るべからず。自己の爲めに、夫を愛する妻ありて、眞に夫を愛する妻なく、夫を敬するの道を解する妻なきは、これ日本の道德の下落せる也。人の道より、動物の道に下りたる也。日本の道德の罪人となりたる也。

明治の文章家

明治の世、何ぞ文章家の俄に輩出せしや。和文、漢文、洋文、俳文、白石、鳩巢、益軒、淇園など徳川時代の漢學者の物せし普通文、西鶴、其積、馬琴、種彦、京傳、一九、三馬等の作りし小説の文體などを、或は混和し、或は折衷し、更に自家の工夫を加へ、終に言文一致の新體をさへ出し、文體千差萬別、百花咲き亂れたる觀も當ならず。

まづ文章家としての新聞記者をあぐれば、福地櫻癡、福澤諭吉、徳富蘇峰、朝比奈知泉、

陸羯南、三宅雪嶺、島田三郎、中江兆民、黒岩涙香、福本日南、中井錦城、鳥谷部春汀などあり。

文章家としての雑誌記者をあぐれば、井上巽軒、坪内逍遙、森鷗外、北村透谷、星野天知、田岡嶺雲、山路愛山、高山樗牛、内村鑑三、松村介石、久保天隨、中内蝶二などあり。

文章の見るべき小説家をあぐれば、饗庭篁村、山田美妙、尾崎紅葉、川上眉山、宮崎三郎、幸田露伴、齋藤緑雨、樋口一葉、遅塚麗水、田山花袋、泉鏡花、小栗風葉、後藤宙外、徳富蘆花、中村春雨等あり。

擬古文の作家としては、前田香雪、依田學海、落合直文、池邊義象、大和田建樹、久米幹文、中村秋香、坂正臣諸氏あり。

韻文家には、佐々木信綱、與謝野鐵幹、鹽井雨江、武島羽衣、正岡子規、島崎藤村、土井

晩翠、薄田泣菫諸氏あり。

余もとより寡聞、右に掲けたる諸氏の外、數へもらしたる文章家も多かるべし。又右に掲けたる諸氏といへども、悉く其作を讀破したるに非ず。されば一々精しく批評する能はず。唯我が知れる限りに於て、感じたることを書きつゞけむとす。

福澤翁は、明治の一大文才なる哉。平易にして流暢、奇警にして趣味あり。巧を文字の末に弄せずして、力を全體の言ひ廻はし方に用ひ、才氣自ら躍動す。及び易からざる也。

福澤翁を學びて、別に一體をなせるものは、坪内逍遙の文也。周市にして綿密、而も趣味あり。されど、強ひて面白くせむとて、道具立を多くせる形跡見ゆ。福澤翁より文才少し下れるもの乎。逍遙の門下、最もよく其衣鉢を傳へたるものは、後藤宙外なるべし。

徳富蘇峰、年少都に出で、一種清新の文體、天下の文壇を風靡せり。一代の奇才といふ

べし。思想豊富、才調宛轉、觀察また奇警也。常識あまりに有り過ぐるを以て、散文的也。其弟蘆花の文は、詩趣に富めり。阿兄の文と對立するに足る。亦一異材也。

三宅雪嶺の文は、一種の仙氣あり。眞面目なるが如くにして、ふざけ、ふざけたる如くにして、眞面目也。奇抜なる所もあり、雄放なる所もあり、思想筆力共に凡ならず。氏はたしかに一種の文豪也。唯新聞記者として經綸策なし。蓋し氏は政治家にあらずして、むしろ學者也。哲學など談ずる方が、その適する所なるに、枉けて時事を論じ、政治を談ず。新聞記者として適せざる所、これやがて雪嶺の本領也。

志賀劔川曾て文名ありたりき。今もなほ日本風景論は世に讀まる。氏多少の文才なきにあらざるも、到底小説家の手腕也。文字絢爛を極めて、少年をして面白く讀ましむる所、氏の得意也。而して穉氣多し。氏にして今ひと奮發せば、一種の文豪となるを得む。

曾て「國民之友」と「日本人」と對峙したりき。而して「國民之友」に「國民新聞」あり。「日本人」に「日本」あり。國民派よりは蘇峰、三叉、蘆花、愛山、湖處子、停春樓を出し、日本派よりは雪嶺、羯南、日南、湖南、劔川、嶺雲などあらはれたりき。これは漢文より脱化し、彼は西文より脱化す。これは莊重にして、彼は輕快也。これは氣を以てまさり、彼は才を以てまさる。すべての點に於て相對峙し、文壇の一奇觀たりき。

田岡嶺雲は、三宅雪嶺の文を學びたるもの乎。飄逸渾厚、紆餘曲折の妙、遙に雪嶺に下れども、一道の霸氣人を刺す。雪嶺の文を淺間山とすれば、嶺雲の文は妙義山也。彼は彪然として大也。此は子々として奇也。近時の文士、青年を刺撃すること、嶺雲の如く甚しきはなかるべし。嶺雲の文、沈痛悲慨、辭氣激越、青年活氣の士をして、一讀骨鳴り、肉躍らしむ。亦一種の文才也。

文科大學の先生連中にては、井上巽軒ひとり文章家也。巽軒詩鈔一部、彼が青年時代の才情才筆をあらはして餘りあり。袖萩は、原文の院本よりもあはれに、白菊の詩は、流暢佳麗をきはむ。其文溶々として大河の流るゝが如く、騶馬の大道を走るが如し。奇を弄せず、小細工せずして、文品自から大也。趣味なきが如くにして、自から趣味あり。自からこれ文に老いたる者。

幸田露伴の文、一氣呵成せるが如くなれども、實は思索して絞り出せるもの。されば雄放渾成の趣なくして捏造したる跡あり。従つて文に勢なし。氏の文は細心巧緻の作也。松柏天を刺すのさまはなくして、庭の植木の觀あり。而して其間にまた多少飄逸奇抜の趣ありて、文才縦横、老将の兵を用ゐるが如きものあり。亦文豪なる哉。

尾崎紅葉にいたりては、更に捏造せるの甚しき者、竟にこれ造花也。毫も生氣なし。され

ど、良工苦心の存する所、才氣人を刺し、絢爛目を奪ふ。まことに錦心繡腸、咳唾珠をなすとは、この人の謂乎。露伴の文は幾んど千篇一律なれども、紅葉の文は變化きはまらず。西文の趣あるものもあれば、西鶴八文字屋の堂を覗ひ、更に進んで王朝時代の佛をうつし、言文一致殊に習練巧妙也。臙脂の氣多くして、文致優婉、露伴の脱俗せるが如き文とは好一對也。露伴を仙人とすれば、紅葉は天女也。紅葉を垢抜けたる老妓とすれば、露伴は氣の利きたる割間也。

もとの硯友社の連中、文を以て紅葉と雁行せるものを眉山となす。眉山は紅葉よりも更に艶麗也。紅葉を世話女房とすれば、眉山は箱入娘也。眉山につぎては花瘦、乙羽二人、文才縦横、亦一種の文章家也。柳浪、水蔭、漣山人などの長所は、文字以外にあるべし。

泉鏡花は鬼才也。文字の末に巧を弄せずして、全體の布置結構、襯接の具合など、奇に

して怪、人をして端倪する能はざらしむ。小栗風葉は、鏡花の奇なけれども、穩健の中に才氣あり。筆よく廻はる。共に其師紅葉と鼎立するに足るべし。

當年の「文學界」よりも、多く文才を出したりき。その主なるものは、透谷、一葉女史、上田敏、星野天知也。透谷は情熱の士、天生の詩人也。其論文に、其韻文に、其美文に、すべて一種の詩趣あり、天才の俤ありき。此人去りてまた詩人的文士なし。凡骨俗腸の輩、まけて文字を美にす。乞食の錦つけたるが如き也。天知は透谷の熱なくして、優婉にして可憐也。上田敏氏も文學界派の特徴なる優婉の趣を得て、自から端麗也。才氣縦横なれども、その上品なる所、活氣を收めて閑雅せまらざる所、殿上人の風采ありと云ふべきか。王朝時代の文殊に源氏物語的筆法を以て論文を草し、西文を譯すること、氏の獨壇なるべし。

一葉女史は、明治女流の偉人也。才力群を抜いて、直に踵を古の清少納言、紫式部に接す。

簡勁奇拔なる清氏の筆と、優麗委曲なる紫氏の筆とを打して一丸となし、紅葉露伴以外、明治の小説壇上に、一種の花をかざれり。露伴の如く氣取らず、紅葉の如く造り飾らず、玲瓏渾成の中に、才氣自から躍動す。奇才なる哉。

「早稲田文學」より多くの文才を出したる中に、抱月宙外の二氏最も名あり。抱月は詩人よりも、むしろ學者なるべし。其議論の氣が利きたること、或は逍遙に過ぐ。頭腦冷靜、思索に長ずる如し。其小説も一種の見處あり。されど、先づ一つ理趣を捉へて、強ひて之に肉づけたるの觀あり。さは云へ、余は茲に單に文章家を評しつゝあるものなれば、他の事は、くだくだしくは評せず。氏の文、明確にして條理井然、唯旨味なし。

周到なる點に於て、好んで簡條わけをなす點に於て、筆よく廻りて趣味ある點に於て、宙外の文は、よく逍遙に似たり。氏の小説、同情にとみて詩趣あり。今ひと奮發せば、明治小

説壇上の第一流たるを得べし。宙外抱月以外、梁川あり、天溪あり、和軒あり、春潮あり。みな早稻田の雋也。

「帝國文學」よりも多くの文才を出したれども、高山樗牛獨り傑出して群を抜く。長き論文を草すれば、堂々として正大、莊重の態度、縦横の辯、自から戰國策士の風あり。短評を草すれば、氣が利きて奇警、才氣人を刺す。而して美文を草すれば、優婉哀切、殘蛩の風露に咽ぶが如し。蓋し情の人にして、理性を合はせ得たるもの、また得易からざる奇才といふべし。潮風、芥舟、醒雪、竹風、姑射、馮虛、天隨、蝶二、瓊音なども赤門の秀才也。

福地櫻癡は、一代の才人也。議論に、敘事に、堂々として縦横自在、自からこれ大手腕也。東京日々新聞時代の作は、今何ふを得ざれども、幕府衰亡論一篇、なほ彼が手腕を窺ふべし。その晩年の小説脚本は、あまり感服し難し。彼は文士を以て起り、文士を以て終らむとす。

中頃の政治上の野心を収めて、早く文學に向ひたらましかば、今少し文學者として成功せしならむを。

中江兆民も一代の文豪なる哉。飄逸にして奇拔、これ其特色也。されば其長ずる所、敘事にあらずして議論にあり。議論にあらずして放言にあり。三醉人經綸問答、以て彼が佛を窺ふべし。譯字の妥當なるは、森田思軒と共に、模範たるに足れり。

文學評論家として、逍遙と對峙せしものを森鷗外となす。鷗外は醫者也。逍遙が評論に創作に、文學社會の木鐸となり、先達となりて、一代の文運を鼓吹せしが如き功勞はなけれども、論據精確、理致深遠なる評論あり。情趣津津たる小説的抒情文あり。すぐれたる翻譯あり。「めざまし草」久しく文壇に雄視せり。其文精嚴にして銳利、亦一代の文豪なる哉。

輕妙の筆は、饗庭篁村を推すべし。巧を弄したる跡なくして自から巧に、輕快自在、滑稽

時に人の願を解く。一種の才筆、他に其比を見ず。

齋藤緑雨が小説の文、字烹句練、巧緻を極めて警句に富めること、當代獨壇也。その正太夫と名のりて物せる放言、皮肉の罵倒を得意とす。銳利にして痛快、眞にこれ寸人鐵を殺すもの。才氣俊邁、筆力矯捷、亦文壇の珍といふべし。

擬古文の中にて、簡勁なるは久米幹文氏、巧妙にして自在なるは前田香雪。他には取りたてよ言ふべきものなし。落合直文氏の文體、さまで古からず。流麗婉轉、才氣横溢す。抒情的敘事文の作家として、一種の文豪也。池邊義象氏は之に比して、文才數等下れり。大和田建樹氏の文、輕快にして、清新の趣あり。されど、これ高等小學か、中學一三年までの生徒の讀誦に資すべきものにて、深く玩味すべき程のものに非ず。

田山花袋の小説、紀行の文、一體をなせり。清楚にして委曲、景を描き、情を寫して、痒

い處に手の届く心地す。やゝ冗漫にして變化なきは、其弊なるべし。

内村鑑三氏は議論文家の尤なるものといふべし。辭氣激越、筆鋒快利、世を罵りて痛切、蓋し氣を以てまされる者。

黒岩涙香は、新聞記者中の筆最も銳きもの一人也。意到り、筆隨ひ、直ちに人の肺腑を刺す。その小説の文も亦自在也。

此外、小説家に、美文家に、評論家に、著述家に、新聞記者に、雑誌記者に、文章の見るべきもの頗る多けれども、余は批評し得るまでに、ひろく諸家の作を讀まず。唯平生最もよく親める文章に就きて、聊か妄評を試みたり。敢て明治の文章家を盡せるものと云はむや。

練馬の一夜

冬の初つ方、雨痕、路上の泥濘に残れる日なり。甥と共に、姪の嫁せる家を訪はむとて、練馬村さしてゆく。二十年の昔、嫂と共に來りしことは、忘られざれど、通りし路は、最早記憶に存せず。兄死して、嫂は泣く泣く甥をつれて、郷里にかへらむとす。嫂には唯一人の女、甥には唯一人の妹なるもの、生れて間もなく、練馬村に里子に出しおきたるが、この時は、既に四歳なり。乳が無くとも育つ年頃なり。嫂は、つれて歸らむとすれど、姪をあづかれる家にては、かなしがりて、離さうともせず。頑是なき姪も、乳呑み慣れたる里親を、まことの親と思ひ、まことの親を、よその叔母さんとのみ思ひて、里親の家をはなれむとせず。もと金には困らぬ農家也。子も五六人あれど、新に生れし子死して、乳の凝るをいやさむとて、わが姪を預りたるものにて、里扶持をあてにせるにあらず。一年ぐらる前より、兄休職となりて、その里扶持を送るに由なかりしが、それを何とも思はず、はごくむうちにて、

情愛ふかくなりまさりて、我子の如く思ひ、姪も、よくなつきて、割くに割かれぬ中なりければ、今少し年たつまでと乞はるよまよに、嫂も強ふるに忍びず。さらば名残に今一度顔見にとて、余をつれて、その里親の家に赴きたる也。

爾來二十年、甥は生計に追はれて、都に來るに由なく、姪は預けられたるまよに、練馬に生長せり。甥は、十五六歳の頃、都に來りて學びしが、やがて、大阪にゆき、身世思ふやうならで、年三十を過ぎたれど、未だこれと思ふ職を得ず、都に來るに由なかりしが、この頃にはかに上京せり。われに二人の兄あり。二十年前、二人の孤を残して早世せるが、長兄也。次の兄は、七八年前より、都に上りたるが、この秋、病にかかりて、にはかに死せり。甥は、その急を聞いて、大阪より來りたる也。二兄死して、われには、また兄弟なし。七八歳年下なる甥が、弟のやうに思はる。亡き兄の葬送も終りて、甥は大阪に歸らむとす。再逢

期し難し。殊に甥は、生れてより、兄妹親しく語りあふの期なかりしことなればとて、こゝに、二人うちつれて、姪を訪はむとする也。

二十年の前も、兄を喪ひて、こゝに來り、二十年の後、また兄を喪ひて、こゝに來る。さきには、嫂と共にし、今は甥と共にして、訪ふものは異なれども、訪はるゝは同じ姪也。今少し年たつまでと云ひたる儘に、姪は草ぶかき田舎に人となりたれど、里親が深き情に、浮世の貧苦も知らず、田舎相應に教育をうけて、今はその近鄰の物もちの呉服屋に嫁して、裕福に暮せる身也。この二十年間の前半は、われ貧書生の境遇を送り、後半は、文を賣りて漸く口を糊するのみにて、未だ郷にかへりて父の墓に詣づるを得ず、嫂とも相逢ふに由なし。姪もその里親も、折り／＼わが家をおとづれ、我方よりは、母、叔母、姉など、とひゆきしのみにて、われ未だ一度も訪はざりしは、疎懶の罪大也。往いて里親の家に養育の恩を謝し、嫁

ける家にも挨拶しにゆかむものと、心には思へど、疎懶のいたす所、そのうちに／＼とて過ぎしに、今はその思をはたして、心何となくすが／＼し。まづ里親の家にいたる。ゆく路は忘れたれど、今その家を見れば、おほろけながら、なほ記憶に存する處也。殊に嫂が幼き姪を撫して、泣きながらに別を告げしさまは、今なほ目睫の間に存す。父親在り、母親在り。共に年はとりたれど、舊によりて壯健也。長男も田よりかへりて、蕎麥をうち、酒など出して、もろともにもてなす。二十年前、この長男の十四五歳なるをかしらとして、多くの子供が、がやがやして居りしに、今は、この長男の外には、家にのこれるものなし。女は嫁し、男は別に家をなせり。その長男も、今は立派な親父となり、十二歳の子を頭に、二人の子さへありて、家ます／＼榮ゆるさま也。里子に出されて、残酷なる目にあふ例も多かるに、わが姪が、親子揃ひて善良なる家にそだてられしは、却つて、貧しき實家にそだてらるゝよりも、仕合せ

なるべし。學問藝術は、必ずしも、女子の幸福をますものに非ず。否、人によりては、却つて身をあやまるものあり。わが姪は、小學以上の教育こそは受けざれ。その夫は、人から善良にして、その家も、富めり。伉儷もよしの事なれば、女子として、これ以上の幸福はあらずなど思ひつゞけ、そのおひ育ちし里親の一家そろひて、慈愛あふるゝ様を見るにつけても、ますます姪の身の幸福なりしことを思ひて、何となう涙ぐまれぬ。

日くるよに及びて、辭して、程遠からぬ姪の家にく。夫なる人は、他出して、未だ歸らず。火鉢に對して、待つ程に、五六歳ばかりの男の子來り侍す。元氣な顔付にて、つゆ、はにかむさま無し。姪も一人子を生みしが、生れて間もなく死して、乳の凝るに困り、里子にとて預りたるもの也。昨日は人の身の上、今日はわが身の上、子をもつて知る親の恩といふ事あるが、これは、子を預つて養ひ親の恩を知れるなるべし。男の子と女の子とかはれど、

運命は、どこまでも同じく、この杜鵑兒の親も零落して、里扶持を送るに由なけれど、もと里扶持をあてにしたるにあらねば、情うつりて、そのまゝに、とどめ置きて、我が子の如くに、はごくめるなり。甥をさして、これは何者ぞと問へば、若い衆だ。茶屋へいて、ペンス弾かせるだらうといふ。如何にして覺えけむ、ませたる小兒也。紙にて、鯨の形を折りてやり、鯨を見た事があるかと問へば、見た事あり。これくらゐのものと、兩手にて示せる大さ、誇張に失して、その平生も思ひやらるゝに、虚言はつくべからずと叱れば、恥かしかる様もなく、本當は、うそを云つたんだよと、平氣な顔付なるは、未恐しき子と、誰が目にも見る所也。平生亂暴にて、言ふ事をきかずして困ると、姪もこほし居れど、愛になれて、余が見たる程には、悪い子とは思はざるさま也。生みの親にかへす能はずんば、今のうち、教育をつよしめよ。このやうにして育てよは、必ず後日大に害を爲すべしなど戒むる程に、主人

歸り來る。商人とは云へ、田舎にありて、田舎人を相手にして、利で生計を立てむともせざる身に、いと素樸なる人柄也。つゆ飾れるさま無し。よき内助を得て、仕合せなりなどといふは、お世事とのみは見えず。酒肴を饗す。蕎麥をも饗しけるが、これは妻のうちたるものなり。中々蕎麥をうつに妙を得たりといふも、腹から出でたる言葉らしく、和氣霽々たるさまは、その言のはしにもあらはるよに、ますく今の姪の身の上の幸福なるを感じて、いとうれしく、この傾意を用るて量を減じたる酒も、つい飲みすごし、夜ふけたれば、とめらるよまよにやどりぬ。

主人と甥と三人、枕をならべて臥したるが、朝、目さむれば、主人は既に幕中に在らず。甥は、なほ熟睡す。その儘にして、われのみ起きて、戸外に出づ。行くこと數十歩、後よりおうい〜といふ。顧みれば、例の杜鵑兒也。手にて招けば、喜びて走り來る。朝日ばつと

さして、空よく晴れたり。遠林の雲は朝霧を帯びて、薄き、濃き黄葉は、どちらを見ても、あざやか也。志ばし行けば、忽ち西天に、富士山の雪をいたどけるが見ゆ。あよ、いつ見ても、美なる山哉。わが心は、昨日以來、この朝景色の如く、せい〜したるが、現に、このせい〜したる朝景色に對すれば、なほ一層せい〜する心地す。我心出で、この朝景色となれるか、朝景色入りて、わが心となれるかと疑はるよばかりにて、唯この時の胸中は、陶淵明の「欲辨 既忘言」の一句につきたりとぞ覺えし。

流清き石神井川畔を逍遙して、歸途に就く。杜鵑兒に向ひて、汝の母はと問へば、死んぢやつたといふ。かはいさうにと思ひしが、あとにて聞けば、兩親とも健在なりとの事に、余はますく、この兒の將來を悲觀せざるを得ず。世の中には、智より出でたる虚言、方便より出でたる虚言は、必要なるが、五六歳の時より、かく才はじけて、つゆ誠なく、虚言を吐

くこと多きものは、一生小才の域より上には出でず。唯ごまかして、世を渡るの人となるべし。歸り來れば、甥も起き居たり。やがて、主人出で来て、朝食を饗す。われらの爲に新に屠れる鶏の肉、大なる皿に堆し。主人は下戸也。一滴ものますして、頻にわれら二人に酒をすよむ。且つ飲み、且つ話して、午後二時に及びければ、今はとて、辭して去りぬ。去るに臨みて、くれぐれも、杜鵑兒の教育を怠るなと、姪を戒めたるが、聖賢ならば、いざ知らず、常人の教育にては、一半以上は、生れつきのまよに人となるべし。知らず、二十年の後も、この家舊によりて平和なるべしや、否や。

甥とは、多年別れ居りて、志みく話したることなかりしが、この行、共に歩し、共に臥して、はじめ、互に胸襟をひらく。甥は、わが平生身を持つること放縱にすぐるを憂ひ、頻りに戒めてくれたるが、これが親身の誠と、腹の中に涙ぐまる。わが一家は、久しく凋落

せり。殊にみな短命也。祖父は四十八歳にて死せり。父は三十一歳にて死せり。大叔は四十二歳にて死せり。目上の人にて残るは、小叔の親身のみ也。願くは大町家の爲めに自愛せられよなどいふ。その心は汲めど、くよくよ思ふは、却つて害なり。父兄みな早世して、命をわれに譲りくれたり。おかけにて、われは必ず長生すべし。長生するうちには、またよき事もあらむ。安心せよと、笑にまぎらして行く程に、東福寺の門を過ぐ。志ばし身の上の話はやめて、自然の大觀に接せよ。こよへくとて門に入る。この春、八十八箇所詣をしたる時に、覺え置きたる銀杏の樹也。大にして高し。今は一葉も残らず黄葉して、半空を黄了し、風に翻りて、地を黄了す。なんと見事なものにあらずや。櫻よりも楓よりも、なほ一層よしとは思はずやと云へば、甥も、なる程と、うなづきて、互に身の上を思ひ、思はれし兩人、志ばし黙して、無我の域にいりき。家にかへりて、久しぶりにて、

古鐘樓外夕陽殘。
風帶蒼烟晚更寒。
墜葉繽紛黃滿地。
公孫樹上鶉聲酸。

追分曲

明治之初。叔父往守箱館砲臺。公退之餘。會隊下之士。置酒張宴。有本山敬太郎者。陸中之人也。音聲清明。巧謔追分曲。以添興云。後叔父來東都。本山氏亦尋來。余依得相識。氏白哲長鬚。意氣慷慨。剛膽凌人。豪飲健啖。巨觥滿引。口角飛沫。一夕酒酣。有一人出銅貨。令氏嚙之。氏不敢辭。聳肩握拳。快呼一聲。切齒嚙之。歎々有聲。血滴淋漓。而毫不屈。遂碎爲細片而止。亦可以知其爲人矣。方其謔追分曲。清音煥發。節奏快活。昂調曳聲。珠玉走盤。洵絕世美音也。雖群賓既醉。誼譁雜沓。而一聞其聲。則不覺正襟而坐。肅然而吞聲。

豪快男子。而有此技。益可貴也。氏許有一少女。曰阿雪。加賀之產。幼遭家道零落。爲人所鞠養。蓋欲待其長而婚也。既而翻意棄之。而不顧。本山氏義俠。受而子之。養之。芳紀方三五。雪肌豐頰。朱唇含笑。嬌眼如眠。楚楚動人。恰如花帶露。就本山氏學追分曲。嬌喉轉玉。梁塵爲動。雖不如本山氏之高壯。而婉美則過之。風月之夜。聽之不覺神逝也。無幾本山氏破產。阿雪來寓我兄家。深慨長於流寓之間。而不能學。雪曉雨夕。時就余而學。然資性不敏。遂莫所成。及家兄捐館舍。阿雪又流寓。今不知其存亡如何。

桂月文選終

大正四年二月七日印
大正四年二月十日發

刷行

桂月文選

定價金壹圓參拾錢



著者 大町桂月

發行者 加島虎吉

印刷者 平井登

東京市日本橋區本石町三丁目十四番地
東京市本所區番場町四番地

發兌

東京市日本橋區
本石町三丁目
東京市日本橋區
人形町通住吉町

電話本局長三六六番二一六七番
振替口座東京一七四四番
電話浪花一九四九番
振替口座東京一九八四二番

至誠堂書店
至誠堂小賣部

場工分社會式株刷印版凸 所刷印

東京日日新聞記者
松内冷洋先生著

大町桂月先生著

軍國の少年一讀意氣衝天の感あらん

少年文學 日本人の弓矢

四六判 上製全一冊
定價 金六十錢
郵税 金八錢

歐洲の列強今や干戈を執つて起り、我日本亦之に加はれり、而して米國之に加はらば、やがて全世界の戦争とならむとす。日本國民の憤慨鬱鬱として掛るべきは實に今日に在り。朝には大隈伯若返つて首相となれるあり。野には天下一品の文豪、青年指導の泰斗、大町桂月先生亦若返つて此著あり。至誠天地を動かし、壯烈鬼神を泣かしむ。日本男兒の粹なる大町先生、日本人の特色を發揮して餘蘊なし。滿天下少年諸君の好讀物として、最道絶妙の快著なり。歐洲の風雲を睥睨する豪傑兒をして血躍り、骨鳴らしめし。

戦雲世界を蔽ひ壯烈の氣紙上に躍動す

菊判美本全一冊
定價 金八十五錢
郵税 金八錢

世界未曾有の歐洲大戦亂は何故に起つたか、對戰國は如何にして雌雄を決せんとするか、其複雑な關係を、最も分り易く、最も面白く、最も通俗的に書いたのが本書である。興味と理解の兩方面から、この未曾有の大戦亂を説いたもの天下たゞ本書であるのみ家庭争談に、社交戦争談に、この未曾有の大戦亂を説いたもの天下たゞ本書である。全世界に雄飛せんとする我が國民は是非一讀せらるべし。

世界未曾有の歐洲大戦亂は何故に起つたか、對戰國は如何にして雌雄を決せんとするか、其複雑な關係を、最も分り易く、最も面白く、最も通俗的に書いたのが本書である。興味と理解の兩方面から、この未曾有の大戦亂を説いたもの天下たゞ本書であるのみ家庭争談に、社交戦争談に、この未曾有の大戦亂を説いたもの天下たゞ本書である。全世界に雄飛せんとする我が國民は是非一讀せらるべし。

菊判美本全一冊
定價 金八十五錢
郵税 金八錢

世界未曾有の歐洲大戦亂は何故に起つたか、對戰國は如何にして雌雄を決せんとするか、其複雑な關係を、最も分り易く、最も面白く、最も通俗的に書いたのが本書である。興味と理解の兩方面から、この未曾有の大戦亂を説いたもの天下たゞ本書であるのみ家庭争談に、社交戦争談に、この未曾有の大戦亂を説いたもの天下たゞ本書である。全世界に雄飛せんとする我が國民は是非一讀せらるべし。

大正著名文庫

杉村楚人冠先生著

口繪及裝幀

六葉

へちまのかは

四六判特製美本
紙數四百五十頁
定價金壹圓貳拾錢

本書は現文壇の重鎮楚人冠先生が廿餘年の心血を凝がれたる力作なり。先生は文才氣煥發行く處として可ならざる心血を凝がれたる力作なり。個性のよく發揮せられたるもの天下其の比を見ず是れ先生一代の傑作集にして近來稀有の快著

世評一斑

時事新報曰く、著者二十十年間の波瀾ある生活を叙述せしもの筆や斷じて能く模倣追隨を許さざるものあり獨得の調子と奇想天外の落想とは必ず讀者を魅し去つて已まざるべし
高朝報曰く、リアンの學生、講師、官吏の實生活を描いたるもの著想奇警加ふ
○大日本茗溪會より本書を普通教育振興の爲め大正三年五月全國各學生及青年の讀物として現代斬新文學の模範として審査選定せらる

大正著名文庫

村上浪六先生著

口繪及裝幀

著者自畫自書

罵倒録

四六判特製美本
紙數四百頁
定價金壹圓貳拾錢

世評一斑

●實業之世界曰く、本書は大正名著文庫の第四編であつて其先出姉妹篇として既に和垣博士の兎糞録、大町桂月氏の人の運、杉村楚人冠氏の「へちまのかは」等を出して居る……
▲其雄健にして圓轉滑脱せる工合などは凡筆とは決して云へない……
▲本書は氏一流の筆鋒を鋭くして、片端から小氣味よく罵倒した社會觀人生觀浮世觀で其の世道人心を從論横議せる所、キビくとして痛快を極めて居る……
▲精勵刻苦の蟻が午睡を食つて居る人を罵倒する、春麗かな日、翻縁として戯む
○浪六先生曰く、あまり大膽なる露骨なる無遠慮に過ぎたれど實際是れが我輩近來に於ける快文字なりと！

傳叙自生先六浪書奇大一

浪六先生著

▲口繪著者自畫自書コロタイプ版珍品十數葉

我五十年

四六版特製箱入美裝
紙數 四百六十頁餘
定價 金一圓五十錢
郵送料 金十錢

事實は小説よりも奇なりと云ふ語を始めて浪六先生の『我五十年』に證明せらる、生れて今日に至るまで人生の波瀾曲折を極めし先生の一代記を最も大膽に最も露骨に告白せるもの、机上の筆を以て書きしにあらず、現在の身を以て著はせる五十年間の生證文にして所謂文士なるもの、自叙傳にあらず、其の一例を擧ぐれば滿天下の讀書界を風靡せし五人男の如きも各その本名と實際の事實を現はせり、全編いやしくも一字一點の架空文字なし、多年浪六先生の小説を讀みしもの必ず本書を讀まざるべからず、

福本日南先生新著

刊新最

大勢史眼

菊判特製全一冊
定價金壹圓廿錢
郵税内地金八錢

著者の題言に曰く『歐洲大亂の遠因は伯林條約の翌日に發し、其近因は奧國のボスニア、ヘルゼゴヴィナ併合の當日に在り。カイゼル野心の意圖範圍は何處に在る。英露佛の三國協約と及其聯合運動は如何にして促成せられたる。伊國は何が故に中立したる。日本は何が故に戰爭に参加せざる可からざる。是等を詳悉せざれば、戰爭の終結と未來の大勢及國策を談するに足らず。然も之を詳悉せんと欲すれば、尙然たる近世外交史中に没頭せざる可からず。斯くの如きは世務に俯仰する士人の能くする所に非ず。我れ之を憾み、數十年を貫串し、務めて大勢の遷移する所を綜攬し、世務家就中政事家の參稽に資せんと欲す』と。人若し之を繙かば、坤輿を掌上に旋らし、大勢を眼下に指點す可し。

大町桂月先生譯評 新日本外史

本書は近世の偉人絶代の文章... 袖珍特製美本 特價金壹圓貳拾錢

友田宜剛先生評 新文章軌範

文章は經國の大業... 袖珍總クローズ 正價金壹圓拾錢

新漢文叢書第三編

濱野三郎先生註解

新譯孟子附索引

全四十卷縮刷 袖珍特製美本 正價金九拾錢

文章は奔放自由を極め英氣の潑刺たる比喩の巧

文章は奔放自由を極め英氣の潑刺たる比喩の巧... 全壹册 紙數三百五十頁

新漢文叢書第四編

大町桂月先生譯評

新日本樂府

當代に異彩を放てる大町桂月先生... 袖珍總クローズ 正價金五拾錢

山陽獨得の尊王精神... 活躍す！

水滸全傳

水滸傳は支那小説中の絶頂也... 袖珍天金特製郵税金各八錢

大町桂月先生新譯

孔子は世界三聖の一也... 袖珍天金特製郵税金各八錢

演義三國志

三國志は支那小説の隨一なり... 袖珍天金特製 正價各金壹圓廿錢

新大學中庸

大學は儒學の原理を説明し中庸は孔門傳授の心法を述ぶ... 袖珍特製天金 正價金六十錢

八保天隨先生譯補 全百廿回縮刷全二冊 紙數上卷千三百頁下卷千二百頁

久保天隨先生譯補 縮刷 全二冊 紙數上卷千百頁下卷壹千頁

濱野知三郎先生譯解 縮刷全一冊

町桂月先生校訂解題(學生文)史傳・修養・教訓・文藝・隨筆の古典名著
袖珍特製頗美本 各册金參拾錢 郵稅各金四錢 五册以上壹割引 郵稅不用

南朝史傳

皇正統記吉野拾遺櫻雲記を收む皇統の由り來る處を論じ國家の治亂興亡を説き南朝の統を明かにし筆致堂々として正大也

源平盛衰記

文章雄健にして而も事實の精細を極め源平二人が成敗の跡歴然として眼前に見るが如く興味亦た津々たり

太平記

桐公誠忠の輝ける歴史は國史中の一異彩也當時の事蹟を總括せるは本書の外に求む可らず

曾我物語

其の文章の流麗なる其描寫の委曲を盡せる實に七百年前に於ける富士山麓の復讐を目前に斐靡せしむ

常山紀談

名將勇士の逸話逸事を蒐録し戰國時代の武士が互に節を慎しみ義を守りし武士道の典型を示せし常山慨世の名著也

先哲叢談

江戸時代前半の學者七十二人の人物性行を記せし漢文を平易に假名交りに譯せるもの興味津々として盡きず

心學道話

平易にしてしかも心理に透徹し笑言戯語の中に無上の教訓を含む修身齊家精神修養の良書

益軒十訓

人倫五常の大意を説き父母を養ふに其の志と體との二あるを示し義理と利養との輕重を訓し堪忍制欲の要勸慎敬儉の徳を述ぶ

日本外史

原文の妙味を知らんとする者は本書を讀め漢文に句讀訓點送り假名を附して初學者に讀み易からしむ校訂の嚴密なる印刷の精麗なる實に本書の誇とする所なり

義經記

悲壯又慘愴英雄の末路人をして卒讀に堪へざらしむ吉野山の雪中奮闘の條の如きは世に有る條の快文字にして史跡の壯觀なり安宅の關の條殊に慘愴を極む

新謡曲全集

創作時代の謡曲を基礎とし之に各流諸方の相違せるものは一々脚註し文章通じ難きは細かに其出典を究めて考證解説せり諸曲文學は細味はんと欲する者は非本書に依らざる可らず

狂言記

無邪氣の中傑作八十番を選ぶ日本國民は快調也笑の發揮せられたる一文藝也一藝術也快男は狂言に對して大いに笑はん哉

新一休諸國物語

機智滑稽の裡に萬斛の涙を含む所之れ一休獨得の神秘也本書は彼が諸國雲遊物語の粹を集めたるものにして内容の豊富なる從來其例を見ざる所なり

新太閤記

大師は弘法の専有となり太閤は秀吉の専有となる秀吉は實に我國史上に一頭地を抜きたる大陸的英雄也競争激烈なる現代に活躍する者は戰國時代の優勝者に學ぶ所あるべし

新百人一首一夕話

かるたは日本特有の國民的遊戯也敏捷勇敢なる國民性を發揮す百人一首の注釋書は多岐なまど能く歌を解き兼ねて作者に關する面白き材料を集めたるは本書の右に出づる者なし附録として「歌がるた必勝法」を添へたり新年の閑日月には國民一般必讀の良書也

新西遊記

想像の奇著想の怪實に天外より來る皆一讀壯絶快絶巻を措く能はざらしむ

博士 和田垣謙三先生著
青年諸君
 (改訂増補貳拾壹版)

國民新聞評、著者の滑稽と
 妙文とは世之を知る意
 識の該博にして論旨の意
 に出づる處殆んど敵手無
 奇書のひとつ云ふに憚らず

四六版特製
 定價金壹圓
 郵税金八錢

大學教授 和田垣謙三先生著
世界商業史要

東京朝日評、太古三千載に
 互れる世界商業の盛衰を縦
 談横説して博士の蘊蓄を傾
 寫し盡せり：一般學生の傾
 讀まざるべからざる良書の

菊版總クローズ製
 定價金壹圓廿錢
 郵税金拾貳錢

山垣博士戲著 川村書伯艸畫
餅

正月の芽出度餅に無限の寓
 意を托して人生最大の氣持
 心持を縦説横論せしもの諧
 諷刺を酒脱の中に趣味と教
 訓とに富める古今獨歩也

袖珍美本全一冊
 定價金貳拾五錢
 郵税金四錢

殿下上覽の光榮を賜ふ
 垣博士 中谷無涯兩先生著 (文部省檢定済)
體歌
 儀鐵笛先生 東京音樂會作曲

戊申詔書の聖旨を奉體して
 解し易く面白く朝夕吟誦
 せば長き大御心の程推し奉
 せられて限りなき聖恩に浴す
 べく萬民必讀の國民的唱歌

全一冊
 定價金五錢
 郵税金貳錢